琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介「河童」研究(下)

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2012-10-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25194

芥川龍之介「河童」研究（下）

小澤保博 *

A Study of Note on R.Akutagawa's *Kappa*

Ozawa Yasuhiro*

⑧「幸福は苦痛を伴ひ、平和は倦怠を伴ふとすれば、―？」、この箴言の直接的な意味を「河童」作品で検証すれば、第一には家族制度に対する疑問を呈している。「河童」(八)に登場する硝子会社社長のゲエルは、河童国の富と権力を掌握して社会の頂点に位置している。僕が個人的な好意を抱く彼は、誰よりも大きな腹を抱えている。「しかし荔枝に似た細君や胡瓜に似た子供を左右にしながら、安楽椅子に坐つてゐる所は殆ど幸福そのものです。」(八)、言うなれば仏蘭西語で戦争を意味する名前を持つ河童国の独裁者は社会の頂点に登攀した訣である。「河童」(八)に登場する硝子会社社長の存在が、著者の考える幸福と平和の象徴の具現的な姿である。権力者である硝子会社社長の絶頂の果てに待っているのは、怠惰と倦怠の結果の堕落である。そして、現在の幸福を享受しながらも全てを失う喪失の不安から逃れる事は出来ない。この一文の断章に付随した「―？」とは、具体的に言えば硝子会社社長のゲエルが、その名の通り地位保全の目的で戦争を暴発させて凋落するやも知れない疑問符である。

先の家族問題の主題に絞って考察を加えれば、硝子会社社長ゲエルの対極にいるのは自由恋愛家である詩人のトツクである。「(トツクは自由恋愛家ですから、細君と云ふものは持たないのです。)」(五)、しかし彼は自由の代償として精神の安定を失っている。睡眠障害、不眠症の為に幻覚を見ている。「何あの自動車の窓の中から緑いろの猿が一匹首を出したやうに見えたのだよ。」(十)、最終的に詩人トツクは拳銃自殺で死ぬ。

音楽家クラバツクの場合はどうであろうか。資本家ゲエルとは違った意味で、この大音楽家は贅沢な生活をしている。「タナグラの人形やペルシアの陶器を部屋一ぱいに並べた中にトルコ風の長椅子を据ゑ、クラバツク自身の肖像画の下にいつも子供たちと遊んでゐるのです。」(十)、しかしこの大音楽家は批評に苦しみ、さらには同業者である音楽家ロツクの存在に脅かされている。その内実は、「僕の抒情詩はトツクの抒情詩と比べものにならないと言やがるんだ。」(十)、これは放蕩無頼の生活の詩人の感性に平穏な生活を送る大音楽家が、見劣りしている、幸福と平和が彼の作品に停滞、後退さらにはマンネリ位相を齎しているという指摘である。さらに目前に自分を凌駕するロツクの存在がある。自分の素質が、努力の結晶が対立者ロツクに及ばない事を「阿呆の言葉」著者である哲学者マツグは、知っている。するとこの箴言は、幸福と平和の安穏な生活にある大音楽家であるクラバツクの現在の名声に対して哲学者マツグの発した警句的警告であるやも知れない。

筆者である芥川龍之介は、幸福と精神の平安が作家として停滞と後退を齎すかを熟知していた。肉体の衰弱と精神の平衡感覚の喪失が結果的に芥川龍之介のその創作活動を鋭意、そして繊細、さらには最晩年は蒼涼、鋭く華麗にした事が、後の作家に甚大な影響を与えた。太宰治も三島由紀夫

＊国語教育教室

も幸福と平和が、創作活動に停滞を齎すことを認識していた。二人は、意識的に最晩年の芥川龍之介が追い込まれた精神の荒野に自己を追い込んでいった。人工的に設定された精神の危機的な状況で停滞と倦怠とを排除していった。

「妻子や家庭やの一切を捨て、自由な漂浪者の群れに入りたいこと。室生犀星君の如く、感情の赴くままに自由な本能的行動をしたいこと。」(「改造」昭和二年九月)。これは一時期田端に居住していた時の萩原朔太郎の回想「芥川龍之介の死」の一節である。自作の中でも芥川龍之介は、同趣旨の記述をしている。「僕はこの商標に人工の翼を手(た)よりにした古代の希臘(ギリシヤ)人(「ギリシア神話に出てくるイカルス〔Isarus〕のこと。名工匠ディダルスの子。父子ともに幽閉されたが、父が鳥の羽を蝋で止めた翼を発明し、ふたりとも脱出した。しかし、イカルスは父の戒めを忘れて太陽に近づいたので翼が溶けて海に落ち、おぼれ死んだ。」)を思ひ出した。彼は空中に舞ひ上つた挙句、太陽の光に翼を焼かれ、とうとう懐中に溺死(できし)してゐた。マドリッドへ、リオへ、サマルカンドへ、一僕はかう云ふ僕の夢を嘲笑(あざわら)はない訣(わけ)には行(ゆ)かなかつた。」(「歯車」五)、この種の発言を聞き記憶した後輩の小島政二郎は偉大な先輩の非現実な夢を後年嘲笑し、その真意を訝った。

当時独身であった友人の小穴隆一の気侭な生活を羨み、養父母に恩人である伯母の監視の中で身動きできないわが身を嘆いた。現状脱出を望みながらそれが叶わぬまま田端の家族の監視の中で絶命しなくてはならなかった。叶わぬ夢は他の作品でも洩らしている。人口の翼ならぬ知力により自己の生存圏を脱出する夢である。その脱出の夢が、知力の限界で失敗することを。「彼はこの人工の翼をひろげ、易(やす)やすと空へ舞ひ上(あが)つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歓(よろこ)びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。(中略)丁度(ちょうど)かう云ふ人工の翼を太陽の光りに焼かれた為にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘(ギリシヤ)人も忘れたやうに。・・・・・・」(「或阿呆の一生」十九)と書いている。

芥川龍之介文学の継承者たる太宰治も最晩年に幸福と平和が、精神の停滞と創作行為の沈下を齎すことを熟知していた。栄光と名声の只中で太宰治は、それが危険であり倦怠の源泉であることを予感し、破壊する方法に出た。後進の太宰文学の革新性に疑念を見せる老大家(志賀直哉)に対して果敢に挑戦した。「私は、その者たちの自信の強さにあきれてゐる。彼らの、その確信は、どこから出てゐるのだらう。所謂、彼らの神は何だらう。私は、やつとこの頃それを知つた。家庭である。」(「如是我聞」一)。

「幸福は苦痛を伴(ともな)ひ、平和は倦怠(けんたい)を伴ふとすれば、一?」、芥川龍之介最晩年のこの箴言で結果的に太宰治は、自分の頂点を極めた人生に決着を就けたと言える。この箴言の末尾に付けられた疑問符「一?」は、芥川龍之介の最後の人生の躊躇(ためら)いを見せている。文学上の名声の最高潮において死にたい。この秘めた決意を芥川龍之介は、他でもその吐息を洩らしている。「トルストイは彼の死ぬ時に『世界中に苦しんでゐる人々は澤山(たくさん)ある。それをなぜわたしばかり大騒ぎをするのか?』と言つた。この名聲の高まると共に自ら安じない心もちは我われにも決してない訣ではない。」(「続西方の人」十四)、この最後の一文が冒頭に掲げた箴言の末尾の疑問符「一?」の具体的な内容である。

「河童」(十)のこの箴言は、芥川龍之介をそしてそれに続く後継者達の運命を暗示している。現状に満足せず果敢に挑戦する挫折の予定された人生を「西方の人」(「続西方の人」)に書き残した。その浪漫的精神を芥川龍之介は、予定された挫折の人生で把握した。「それは天上(ママ)から地上(ママ)へ登る為に無残に折れた梯子である。」(「西方の人」三十六)という一文に自己の浪漫的精神を収斂させて見せた。この箴言、断章は芥川龍之介のみならずそれを信奉する者に孤立を強いる思想である。幸福と平和が芸術の創作に停滞、後退を齎(もたら)すのであれば芸術家は、存在自体が悲劇的である。余人は例外なく幸福と平和を希求して人生を生きているが、それを獲得する手段は千差万別である。

人生の局面は無数の無解決の難題を抱えて個人の私生活を侵食する為に押し寄せて来る。難問解決の方法論の一つは、自己の精神をある種の範疇に組み込む事である。学閥、派閥、そして特殊な政治結社、宗教組織である。無限大の難問、要求に臨機応変に対応して処理出来る程に個人は偉大ではない。神は、最初からそれ程の能力を人間個人に与えなかったと断定出来る。人生の局面をある種

の色彩で染め上げる事である。学閥、これは私には無縁な存在であるが、縁あって学閥に安住する教授連を個人的に接待した経験はある。彼等は、定見、強固な信念を抱いて生きているので自己の属する組織の範疇にのみ正義を見出し、他者の存在に気付く事はない。彼等は、揺るぎがたい信念で行動し自己の色彩で外界を見るので沖縄に来て異色の外界に接触しても来ないのと同じである。

以下は、司馬遼太郎の司馬史観である。ノモンハンの敗北をガダルカナルで再度繰り返し、日本軍人の遺体の山を築きながら陸軍大学卒のエリートは、敗戦を迎え帝国陸軍が解体するまで自己の誤りに気付かなかった。問題は作戦ではなくて戦略であることに軍事の天才達は気付かなかった。祖国防衛の為に数百万の日本軍人が異国に白骨を曝し、日本国家転覆を企てた共産党員が戦後五体満足で拘置所から釈放され、さらに無謀な作戦を強行した陸軍大学、海軍大学卒業のエリートが戦後社会を無事生き延びた。これで日本国家、日本民族が存続できたのは不思議である。学閥エリートの誤謬に対し、絶対にお咎め無しの風潮を日本人の秀才信仰と司馬遼太郎は言う。学閥に安住した者は、自分が手中にした幸福、平和に安住して最後まで外界の事物の激変に気付く事はないという訣である。

学閥に所属できなかった者は、どうして幸福と平和を手中にするのか。残された道は、特殊な宗教組織、政治集団に属する事である。幸福と平和を永遠持続可能なものにする為の手段は、明治の代に夏目漱石が言ったように「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか」(「行人」)で、現在はこれに共産党に入党しようかという選択肢が加算されている。しかし、特殊集団に属した者の言動は他者から傍観すればピエロである。ソ連共産主義による世界制覇を願望し、共産主義社会の現実を黙認して「資本論」を介し、マルクスの視点で世界を眺望した向坂逸郎、大内兵衛は、マルクスの神を信奉して生涯を終えた。彼等の精神は「資本論」により幸福と平和が齎され、終生動揺する事はなかった。

芥川龍之介が掲げた箴言「幸福は苦痛を伴ひ、平和は倦怠を伴ふとすれば、―？」は、芸術家を破滅に導く断片、学閥、宗教、共産党にも属する事なき鋭敏なる才能を自殺に先導する不吉な箴言である。しかし、学閥に安住する無能な教授連の破廉恥な行動を無数に目撃し、宗教、政治集団に安住して暴走言動を成す教授連を辺境の地である沖縄で目撃してきた私には、民族の救いを暗示する断片として読める。未来の深淵に向かって驀進する事では、永久革命の民衆主義者丸山真男とその亜流も同一路線のように見えるが、内実は違う。彼等は、職場に人民裁判と粛清劇を持ち込み民族の伝統を破壊し、人民国家樹立を政治目標にした教条主義集団である。空虚な人生に徒手空拳で立ち向かった天才的な創作者の範疇に属さない事は、言うまでもない。

⑨「自己を辯護することは他人を弁護することよりも困難である。疑ふものは辯護士を見よ。」、これから問題にするのは最晩年の芥川龍之介に衝撃を与えた姉葛巻ヒサの再婚相手である弁護士西川豊の自殺の課題である。西川豊の自殺は自己証明の為の自殺であるが、これは「河童」(十二)で描かれているので最初にこの問題を考えて見る。「その河童は誰かに蛙だと言はれ、一勿論あなたも御承知でせう、この国で蛙だと言はれるのは人非人と云ふ意味になること位は。一己は蛙かな？蛙ではないかな？と毎日考へてゐるうちにとうとう死んでしまつたものです。」(十二)と描かれている。西川豊宅が全焼し、直前に多額の保険金が掛けられていた為に放火を疑われ、自殺した。事実関係は、どうであれ芥川龍之介は義兄の鉄道自殺を自己証明の為の自殺と認識したのである。この場面は、私個人に取っては衝撃的な微笑を浮かべる体の印象的な場面である。

三島由紀夫が自殺したのは、私の学生時代である。「豊饒の海」(「天人五衰」)の最終巻が、一挙掲載になったのは没後一ヵ月後であるが、「天人五衰」(「新潮」昭和四十六年一月)を貪り読んだ記憶が昨日のように蘇る。この遺稿の中で三島由紀夫は死の形而上学を展開しているのである。億万長者に成った本多繁那の養子に迎えられた安永透が、東大生になる為に大学受験の特訓を受ける場面がある。脅威の知能指数を有するこの少年に最高級の受験技術を短時間に授ける為に雇われた東京大学の学生国語担当の古澤が、戯れに語る死の形而上学的考察である。古澤は、前置きで次の

ような見解を披露する。「大體僕は自殺する人間の衰へや弱さがきらいだ。でも一つだけ許せる種類の自殺がある。それは自己正當化の自殺だよ。」(「天人五衰」十八)、これは十数年以前に三島由紀夫が芥川龍之介の自殺に就いての見解を披露した意見の再収録である。「私は自殺をする人間がきらひである。」(「芥川龍之介について」芥川龍之介読本所収)、ちなみに芥川龍之介作品を論じた三島由紀夫「『南京の基督』解説」には、作品論の対象として「河童」は舌頭に上がっていない。(註1)

「河童」脱稿(「昭和二年二月十三日」)から数日後、義兄西川豊の自殺に衝撃を受けた傷心の芥川龍之介の姿を広津和郎が、記録している。改造社主催の歌舞伎座での観劇会で遭遇した芥川龍之介の姿を映している。(「昭和二年二月十九日」)。この日は広津和郎の記憶では芥川龍之介は、観劇の為に鵠沼から上京したことになっているが、年譜では記載がない。広津和郎「あの時代」収録の芥川龍之介発言は、以下のようなものだ。「君、義兄の奴が自殺してね」「弱っちまうんだよ。あの跡始末がまだついていないんだよ。あれも俺の肩にかかって来るし・・・・・・その外にまだいろいろあるんだ・・・・・・俺はもうやりきれないよ」(「あの時代」一)というものである。

義兄の自殺が、芥川龍之介に衝撃を与えたのは扶養家族を大勢抱え込んだ当時の彼の生活にさらなる重圧が加わったからである。その辺の事情に就いて芥川龍之介は率直に語っている。「彼の姉の夫の自殺は俄かに彼を打ちのめした。彼は今度は姉の一家の面倒も見なければならなかつた。」(「或阿呆の一生」四十六)というようにである。弁護士の平松麻素子の父の縁で帝国ホテルで執筆中の芥川龍之介に、自殺した姉の夫の娘、姪から西川豊の鉄道自殺の一報が入るところから「歯車」(一)は、始まる。(芥川龍之介)「どなた？」「何だい？どうかしたのかい？」「大へんなこと？」(葛巻さと子)「あたしです。あたし・・・・・・」「ええ、あの大へんなことが起つたんです。ですから、・・・・・・大へんなことが起つたもんですから、今叔母さんにも電話をかけたんです。」「ええ、ですからすぐに来て下さい。すぐにですよ。」(「歯車」一)。これは帝国ホテルで執筆中の芥川龍之介が葛巻さと子から義父の自殺の知らせを受ける場面である。葛巻義定と姉ヒサとの間に出来た二人の子供の内で義敏は芥川龍之介邸で養育され、さと子は新原家にいた。西川豊と姉ヒサとの二人の子供瑠璃子、晃は当時幼いので電話の相手は西川瑠璃子ではない筈である。

弁護士に就いてのこの箴言は、義兄の無残な最期から類推された文言である。「河童」(十一)で哲学者マツグ「阿呆の言葉」で記述された後にも遺稿「或阿呆の一生」(辯護)でも同文で登場している。「他人を辯護するよりも自己を辯護するのは困難である。疑ふものは辯護士を見よ。」さらに同じ遺稿「闇中問答」にも同趣旨の一文がある。「僕　自己辯護は容易ではない。若し手安いものとすれば、辯護士と云ふ職業は成り立たない筈だ。」(「闇中問答」一)

⑩「矜誇、愛慾、疑惑—あらゆる罪は三千年来、この三者から発してゐる。同時に又恐らくはあらゆる徳も。」

この箴言は「河童」作品中の関係に直接には、言及出来ない。おそらくは過去の芥川龍之介の思惟の中から派生した一般的な見解ではないか。この断章で思い付く事項は、吉田弥生への執着、愛惜、後悔の念の芥川龍之介の人生に及ぼした精神的な外傷ではないか。芥川龍之介没後の回想、富田砕花「芥川君を憶ふ」(「改造」昭和二年九月)の記述を信じるならば、この箴言の出所は著者の個人的な体験である。

「嫁いだとなつて一層その熱情は昂まつたやうに思へた、私の記憶にして誤謬が無いならばその婦人の結婚式の前日、当時、中渋谷にゐた私のところで二人は最後の会見をしたとおもふ。」(「芥川君を憶ふ」)。これを裏付けるように同趣旨の覚え書が残されている。「〇一月二十六日。今までぼくは彼等の愛の中に生きた。これからは彼等をぼくの愛の中に生かしてやる。」「〇海軍士官の話をかきつゞける。間歇的にくるYのMemoryに壓倒された。」

芥川龍之介の胸中を伝える「手帳」(一)の記述を実作でなぞると、前半箇所は「開化の殺人」(「中央公論」大正七年七月)の心理劇に反映している。後半部分は、「舞踏会」(「新潮」大正九年一月)執筆中の芥川龍之介の動揺を記録したものだ。そして、この間に複雑な心理劇「袈裟と盛遠」(「中央

公論」大正七年四月）で自己の愛人喪失の心理の行方を記述した。貞女の鏡と称される袈裟御前の等身大を「源平盛衰記」を典拠に心理劇に仕立てた。矜誇、愛欲、疑惑と反転した徳目という課題は、「袈裟と盛遠」の主題である。そして、これを創作し独自の視点から作品化達成を成すのに与ったのは、北村透谷「心機妙變を論ず」（「白表女学雑誌」明治二十五年九月二十四日）である。

⑪「物質的欲望を減ずることは必しも平和を齎さない。我々は平和を得る為には精神的欲望も減じなければならぬ。（クラバツクはこの章の上にも爪の痕を残してゐました。）」

哲学者マツグ「阿呆の言葉」のこの箴言に芸術家クラバツクは、注意を払い熟読した形跡がある。という事は、著者に取っては重要な断片であったということである。芸術家クラバツクを芥川龍之介の分身として考察すれば、以下のような結論になる。問題になっているのは、物質的欲望と精神的欲望の対比である。この命題（「These」）の対立的な把握、認識そのものが今日では陳腐である。昭和初期での観点から考察すれば、前半より後半の一文にアクセントがある事が判明する。欧米から比べて物質的に貧弱であった当時の日本では、物質的な充足が幸福に直結する道であった。こうした認識に立脚して前半を通読すれば以下のような理解になる。

経済的な繁栄、俗に金持ちになる事で一般大衆の嫉妬を受ける、さらに個人的に財産保持に神経を集中して安穏な日々を送れない。思い切って財産を放棄して気楽になる道を実践すると安穏な日常が送れるか、答えは否である。（この箴言の前半部分の具体的な実例として自主的な農地解放を実践して経済的な身軽さを手に入れながら、心中に追い込まれた有島武郎の例があったろう。）、後半の断片は著者に切実な課題である。芥川龍之介の最後の課題は同業者からの成果に対する嫉妬であり、文壇批評家からの辛口評価である。この二つの精神的な欲望、自己の作品に対する同時代あるいは後世の名声に対して神経を研ぎ澄ませていた。最後の歴史小説「古千屋」（「サンデイ毎日」昭和二年六月）の口述筆記に難渋し疲労困憊、机に突っ伏してしまった筆記者沖本常吉に自己の著述に対して執念を見せた。「しかし、僕には作品として残る程完成したものがない。せめて文章だけでもきちんとして置きたい。」（「芥川龍之介以前本是山中人」）と語った。

「僕も亦人間獣の一匹である。しかし食色にも倦いた所を見ると、次第に動物力を失つてゐるであらう。僕の今住んでゐるのは氷のやうに澄み渡つた、病的な神滓の世界である。」（「或舊友へ送る手記」）、全ての欲望を喪失してもなお芥川龍之介には創作に就いて二つの欲望が存していた。「河童」（十）に描かれているクラバツクに即して考えてみれば、私生活でさらに芸術方面でも満足している彼を苛立たせるのは、批評家の誤解と対立するロツクの存在である。（「批評家の阿呆め？」「ロツクはいつも安んじてあいつだけに出来る仕事をしてゐる。しかし僕は苛ら苛らするのだ。」十）

これを芥川龍之介の立場で憶測すれば、自己の感受性で勝負し続ける志賀直哉の存在がある。（「・・・・・・・ロツクは僕の影響を受けない。が、僕はいつの間にかロツクの影響を受けてしまふのだ。」十）、こうした立場を芥川龍之介は直接我孫子の志賀直哉邸でぶつけた。創作技巧に関する二、三の注意に対して芥川龍之介は、「藝術といふものが本統に分つてゐないんです」（「沓掛にて―芥川君のこと―」）と応えたと言う。両者は、全く創作上の技法を相違するのに何たることかと嘆いたのは村松梢風である。これを受けて無技巧、天衣無縫の作風の志賀直哉にひれ伏す晩年の芥川龍之介に天才の末路を見出すのは松本清張である。しかし、松本清張「芥川龍之介の死」には彼が志賀直哉の前に完全屈服する私生活上の理由が、憶測で書かれている。

小穴隆一の憶測では、芥川龍之介は新原敏三と芥川ふきの子供であるという。彼の憶測は、確固たる物的証拠に拠るものでなく、我流の推測に拠る。「しかし彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じてゐた。」（「或阿呆の一生」三）や「殊に『新生』に至つては、一彼は『新生』の主人公ほど老獪な偽善者に出會つたことはなかつた。」（「或阿呆の一生」四十六）という記述が、小穴隆一説の根拠である。こうした考えは遺稿でも繰り返されている。「果して『新生』はあつたであらうか？」（「侏儒の言葉」『新生』読後）、こうした一連の芥川龍之介の告白の背後には、ルソー「懺悔録」（「Confessions」）

の影響が介在している。以上の記載事項を参考に考察すると芥川龍之介の志賀直哉に対する屈服は、芸術上の観点から見るべきでなくて私生活上の問題と言う事になる。「『暗夜行路』を讀みはじめた。主人公の精神的な闘争は一々僕には痛切だつた。僕はこの主人公に比べると、どのくらい僕の阿呆だつたかを感じ、いつか涙を流してゐた。」(「歯車」三)という最晩年の遺稿の一文は、志賀直哉に対する芥川龍之介の接近が芸術上の観点からのそれでなくて私生活上、個人的な苦悶からの接近ではなかったかという推測を呼ぶ。

芸術家クラバツクに苦痛を与える別の視点は、批評家の無理解である。松本清張も芥川龍之介が、終生文学専門家の批評の呪縛から逃れられなかったと説く。芥川龍之介の後継者であった太宰治も同じく文壇評価を気にしたが、三島由紀夫からは売れ行きを気に病むようになったと松本清張は言っている。今日の視点から観察すれば、太宰治の時期まで文壇が、存続していたと言える。「どうも評判のいい人の悪口をいうことになって困るんだけど、僕にはどうもいい点が見つからないね。」(「作家の態度」昭和二十三年六月)

この志賀直哉の発言に対して当時「斜陽」で流行作家になっていた太宰治がいかに衝撃を受けたかは、「如是我聞」(「新潮」昭和二十三年三月―七月)が実情を今日に伝えている。作家における批評家の存在に就いては、文壇消滅に重要な役目を果たした松本清張が発言している。(注2)

⑫「我々は人間よりも不幸である。人間は河童ほど進化してゐない。(僕はこの章を読んだ時思はず笑つてしまひました。)、この場面の河童の視点からの揶揄、嘲笑は明らかにスウイフト「ガリヴァー旅行記」(「Gulliver's Travels」)に借りていると思われる。何故なら後世の風刺小説「猿の惑星」には、上記の箴言の影響が見られるからである。数百年亜細亜植民地に君臨して毫も白人優位を疑わない支配者達に艦上戦闘機で襲い掛かる日本人の黄色い顔は、猿の群れが人間社会に襲い掛かるのと同じだからである。河童が人間より進化している為に繊細で壊れやすくて傷つき易いという芥川龍之介の設定である。河童社会に君臨する硝子会社社長ゲエルでさえ、富を憎む社会主義者の罵声で死に瀕するのである。

「わたしはこの間も或社会主義者に『貴様は盗人だ』と言はれた為に心臓痲痺を起しかかつたものです。」(十二)、芥川龍之介自身遺書で「わが子等に」(「七　汝等は皆汝等の父の如く神經質なるを冕れざるべし。殊にその事實に注意せよ。」)と書き残した。上記の断片は、従来人間界から眺望した時に下等動物として見下していた河童から、人間が見下されていた事に面白味がある。この風刺は、今日でも有効で国家でも民族でも個人でも同じである。世界地図の中心に日本が位置している事を当然として認識して来た日本人は、米国に行き世界地図の端に日本が位置付けられていて驚く。中国、朝鮮は現状には関係なく日本を文化的に属国と見做している。旧仏領インドシナや蘭領インドネシアも自国が世界の中心に位置する中華思想で固まっている。個人と言えば、日本社会は無数の眼に見えない階級社会である。学閥、知力、体力、財力に恵まれない者は宗教、政治集団に属する事で失われた誇りと権威を奪取しようとする。謙虚さと低姿勢を装う無頼の徒が、利権を求めてうごめくのが日本民族の社会構造である。個人的には、琉球国で半生を生きた私は東京から客員の教授を夥しく迎えたが、彼等の行動は良くて地方巡回視察を行う明治新政府の役人のそれで、最悪の場合は教授連の振る舞いは、三光作戦の為に支那大陸に侵攻した日本軍人のそれである。琉球国と日本本土の間には、事実上多少の垣根を設けるべきではないかという感想を抱いている。

芥川龍之介自身は、神秘的な傾向に傾く自分の性癖を優れた素質の一環として認識して誇りに思っていた。初期には「天才の人は撞着の人也。超凡の生涯は撞着の生涯也」(「雑感」)があり、最晩年には「精神病者は最も進んだ人間だと云つていゝですね。」(「新潟での座談會」)という発言で周囲を沈黙させている。(「皆な暫く沈黙。」)と速記記者が座談会の様子を記録している。

「侏儒の言葉」(「侏儒の祈り」)には、物質的な希望と精神的な希望が記述される。前者は「どうか一粒の米すらないほど、貧乏にして下さいますな。どうか又熊掌にさへ飽き足りる程、富裕にもして下さいますな。」で後者は、「どうか採桑(「桑の葉をつむこと。なお、『採桑の農婦すら』は主語である。そ

んな女たちからきらわれるほど醜いこと。」）の農婦すら嫌ふやうにして下さいますな。どうか後宮の麗人（「後宮〔皇后・女官の住む宮中奥御殿〕にいる美女。それから慕われるほど美貌なこと。」）さへ愛するやうにもして下さいますな。どうか菽麥すら辯ぜぬ程（「豆と麦とをさえ識別できない。『左伝』成公一八年の条の故事、すなわち、『周子有兄而無彗不能弁菽麦。』〔周子には兄があったが、愚か者であって、豆と麦との見分けさえつかなかった〕という故事により、たいへんな愚か者を形容する時に用いる語。」）、愚昧にして下さいますな。どうか雲気（「古代の天文学者などが雲の色や形を見て天気・勝負・吉凶などを判断したこと。」）さへ察する程、聡明にもして下さいますな。」

芥川龍之介自身は、中庸の精神を憧憬してそうありたいと希望したかも知れない。最終的にそれは願望に止まったようである。自身が切望した中庸な精神を獲得した時に彼の創作意欲は減退し、作家的な自殺行動に連なる。最後の作品、「西方の人」はこうした彼の内心の吐息である。中庸の精神を希求する芥川龍之介の願望は、内心で希求しない希望である。頭角を現すことなく大衆の中で無名に終わることを願いながら、一瞬とでも自己主張しないではいられないのが人間存在である。

卒業生と同伴でバス帰宅時、私と別れの挨拶をした彼が料金を支払って下車した瞬間に運転手の罵声が飛んだ。不正支払いを疑われたのであるが、運転手はバスを五分間停車させて学生に向かって罵詈雑言を浴びせていた。何の為の言い掛かりか、明らかに他府県からの若者に対する言われない嫉妬である。普段我々がバス運転手の存在を意識する事はない訣であるが、この瞬間に無署名の一人の中年男の横顔、そして名前は明瞭に一個の個人としてその存在を主張し始めた訣である。戦時下、終戦直後の配給制度の国民生活いわゆる統制経済では、食料品店から鉄道機関まで全職員は共産党員としての権力を行使して、その存在を主張した。国民全員が自己主張しない中庸の精神で生きる社会こそが、理想社会ではある。しかし、生涯を無名の人間として埋没し人生を終わる事で満足できる者は稀である。又、それを成し得るのは聖人のみであるとも言える。

芥川龍之介は中庸の精神をある側面希求しながら、自己の天才を確信し英雄的な末路を期待していた。つまり発狂をであるが、彼の場合は実母の惨憺たる実像が具体的な戦慄になった節が見られる。「スウイフトは發狂する少し前に、梢だけ枯れた木を見ながら、『おれはあの木とよく似てゐる。頭から先に參るのだ』と呟いたことがあるさうである。この逸話は思ひ出す度にいつも戦慄を傳へずには置かない。わたしはスウイフトほど頭の好い一代の鬼才に生まれなかつたことをひそかに幸福に思つてゐる。」「侏儒の言葉」（『人間らしさ』）、これは裏返しの真実を伝えている。謙虚さを装った芥川龍之介の英雄主義、天才主義の現われである。スウイフト以上の才能に恵まれた自分は、終始発狂の戦慄と内心戦っている、と言うのが偽りのない真実の芥川龍之介の声である。

⑬「成すことは成し得ることであり、成し得ることは成すことである。畢竟我々の生活はかう云ふ循環論法を脱することは出来ない。―即ち不合理に終始してゐる。」、この箴言自体はその全体の意味を明瞭に掌握し難いが、この断章を芥川龍之介自身で循環論法であると言っている。循環論法に就いては、「侏儒の言葉」（神秘主義）で芥川龍之介自ら説明している。「しかし幽霊を見たと云ふ話は未だ時々傳へられる。ではなぜその話を信じないのか？幽霊などを見る者は迷信に囚はれて居るからである。ではなぜ迷信に捉はれてゐるのか？幽霊などを見るからである。かう云ふ今人の論法は勿論所謂循環論法に過ぎない。」（「侏儒の言葉」神秘主義）と言うものである。これも趣旨は、つかみ難いが成功例は自分の強固な意志によるか、偶然によるか判断し難い、という意味か。循環論法の説明が、「侏儒の言葉」（神秘主義）の章にあり、冒頭に人類誕生は進化論か聖書かという自問自答があるので、成功不成功の要因は神秘主義の世界に属するという事であろう。(注3)

⑭「ボオドレエルは白痴になつた後、彼の人生観をたつた一語に、―女陰の一語に表白した。しかし彼自身を語るものは必しもかう言つたことではない。寧ろ彼の天才に、―彼の生活を維持するに足る詩的天才に信頼した為に胃袋の一語を忘れたことである。（この章にもやはりクラバツクの爪の痕は残つてゐました。）、この箴言の前半箇所に就いては文学史がこれを明らかにしている。し

かし、挿話自体は依拠する出典は不明であると「芥川龍之介『河童』注解」にある。(注4)

上記の箴言の主要な意味は、「一彼の生活を維持するに足る詩的天才に信頼した為に胃袋の一語を忘れたことである。」にある。これは前文の一語「女陰(ちょいん)」と対比させて後文の「胃袋」を対照的に考える必要がある。即物的には、ボオドレエルが自由恋愛を楽しんだのは是認できるが自己の詩人としての才能を過信して経済問題に就いての配慮が足りなかったのは遺憾である、という芥川龍之介個人の実感である。「(この章にもやはりクラバツクの爪の痕は残つてゐました。)」は、ボオドレエルの人生を眺望した芥川龍之介の述懐と読むべきである。芥川龍之介は、田端の澄江堂のサロンで気を許した後輩である堀辰雄に頻繁に自己の文学的な素質である欧州世紀末文学に就いて語った。「僕に最も影響を興へたのはポーとボオドレエルだ、好い影響も悪い影響もあつたらうが。」(「芥川龍之介論—芸術家としての彼を論ず—」)という趣旨である。(注5)

芥川龍之介の最期である自殺もこうした欧州世紀末文学の毒を全身に浴びた結果であると言える。上記箴言の前半箇所に就いては、仏蘭西文学辞典はその女性関係に就いて詳細に説明しているが、断章後半に就いては外国で文学方面の講演で生活資金獲得を企み倒れて最終的に慈善病院で惨めに死んだ事を意味しているだろう。

創作上の行詰りを志賀直哉に訴えた折、「冬眠してゐるやうな氣持ちで一年でも二年でも書かずにゐたらどうです、」という助言に「さういふ結構な御身分ではないから」と言うのが芥川龍之介の返答である。親の遺産で何不足なく生活し、道楽で小説を書き続ける志賀直哉とは立場が違うのである。

⑮「若し理性に終始するとすれば、我々は当然我々自身の存在を否定しなければならぬ。理性を神にしたヴオルテエルの幸福に一生を了(をは)つたのは即ち人間の河童よりも進化してゐないことを示すものである。」、この箴言の前半は理性に信を置き啓蒙主義思想の祖となった者に対する反措定(そてい)であり、後者は人間社会を理性で統治すれば破滅になる事を歴史の事例から知った神秘主義者芥川龍之介の皮肉である。ヴオルテエルの啓蒙主義はルソーに繋がり仏蘭西革命にさらには露西亜革命を齎した事に対する芥川龍之介の人間性に対する認識の一端を見せた断章である。ヴオルテエルに就いては、芥川龍之介はその生涯で断続的に感想を書き残している。「或阿呆の一生」(十九)で記述された断章は、知力により自分が生まれ育った貧相な下町を飛翔し、当時知識人の住む東京田端に移住して新局面を展開しながら人生に行き詰まった自己の心中を語った断片である。「(前文省略)人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつた。が、ヴオルテエルはかう云ふ彼に人工の翼を提供した。(中略)丁度かう云ふ人工の翼を太陽の光りに焼かれた為にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。・・・・・・」(「或阿呆の一生」十九)、ここには理性を信じ生まれ育った下町を見下ろして嘲笑するイカロスに自己を仮託することで転落の危惧を抱く芥川龍之介がいる。この時期家族係累の多くを扶養家族に抱えた彼は、文壇生活の窮地に落ち墜落の危険に晒されていた。彼を精神的に、経済的に背後から支える筈の人物義兄西川豊は自殺し、義弟塚本八洲は長期の結核罹患患者で頼りにならなかった。今日では宗教は、救済を希求する者に経済的な負担を要求する側面がある。賢明な芥川龍之介は、ひたすら基督の福音を聞く事に努めた。現実的な救援を宗教に求めたら、宗教界は芥川龍之介の名声を利用しようとして積極的な攻勢をかけて来たであろう。

遺稿「侏儒の言葉」(「理性」)では、人間の知に全幅の信頼を置いて啓蒙主義の祖となり天寿を全うしたヴオルテエルに対する不信を披瀝した断章である。「わたしはヴオルテエルを軽蔑してゐる。若(も)し理性に終始するとすれば、我々は我々の存在に満腔(まんこう)の呪詛(じゅそ)を加へなければならぬ。しかし世界の賞賛に酔つたCandideの作者の幸福さは！」(「侏儒の言葉」理性)「理性のわたしに教へたものは畢竟(ひっきょう)理性の無力だつた。」(「侏儒の言葉」理性)、これらの断章は、先に論評した⑬「・・・・・・即ち不合理に終始してゐる。」という箴言に関係する断章でもある。知力と頭脳を過信して猛進した芥川龍之介晩年の自己の能力の限界を認知した反省文として読める。幸田露伴「努力論」には、運命を過酷にしない為の実践的な方法論が披瀝さ

れている。失敗事蹟に対して自己の能力の総点検を求め、さらに成功成果を独占せずに天に委ねる行為に運命を味方に引き込む具体的な道を模索している。理性を妄信せずに人事の世界に神秘的な介入を認めているのである。

芥川龍之介「ババベツクと婆羅門行者」(「帝国文学」大正七年五月)は、ヴオルテエルの初期の哲学小説である。(注6) この作品は、合理主義の立場からバラモンの修行者の滑稽な神秘主義を嘲笑し、その狂信的な態度を批判したものだ。この時代にヴオルテエルがインドの修行僧に素材を得たのは、英吉利の植民地になった印度の実情が情報として伝わってきたからだと思われる。芥川龍之介が、個人的にこの作品に興味を持ったのは反対に素材としての神秘性と文体の古典的な完成度に興味を持ったからだと思われる。「筑摩全集類聚芥川龍之介全集」(第六巻)は、四篇の翻訳作品を収録している。発表順にアナトオル・フランス「バルタザアル」(「新思潮」大正三年二月)、イエーツ「春の心臓」(「新思潮」大正三年六月)、テオフイル・ゴーチエ「クラリモンド」(「新潮文庫」大正三年十月)、ヴオルテエル「ババベツクと婆羅門行者」(「帝国文学」大正七年五月)である。これら四篇の翻訳小説には一貫して共通の認識が見られると吉田精一は、解説している。「それらは何れもロマンチックであるか、ミステリアスであるかである。もしくは両者を兼ねている。(中略) 四篇の中三篇を占めるフランス物はどれも英訳からの重訳だが、訳文は正確で、且つ豊かな語彙を備えていて巧みな出来である。それは自分の手に合うもののみを選んだためもあろうし、彫琢の苦労を重ねたためもあろうが、勿論ことばに対するセンスの敏感さが基礎になっている。」(吉田精一解説)というものである。

近世欧州に充満していたと思しき神秘主義を打破するために執筆された「ババベツクと婆羅門行者」に何故に芥川龍之介が、関心を持ったか。純粋にヴオルテエルの合理主義に対する反措定として素材の神秘的な傾向に惹かれたためであろう。「彼はアナトオル・フランスから十八世紀の哲学者たちに移つて行つた。(中略) 彼は彼自身の他の一面、一冷かな理智に富んだ一面に近い『カンディイド』(「"Candide ou l'optimisme"〔一七五九〕。フランスの啓蒙思想家・大学者のヴオルテエル〔Voltaire 本名 Francois Marie Arouet1694-1778〕の哲学小説で、彼の代表作。」)の哲学者に近づいて行つた。」(「或阿呆の一生」十九)と芥川龍之介自身が、述懐している。この感想の後半では、ヴオルテエルの理知主義が失墜を齎す危険なものであるという認識を示す。「ヴオルテエルはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。」(「或阿呆の一生」十九)、東京下町で生まれた芥川龍之介に飛翔を許したのは、生活感覚から遊離した理性の恩恵である。そして、それは常に危険と隣合わせであるという認識である。遺稿「侏儒の言葉」(理性)でも同趣旨の発言を繰り返す。「若し理性に終始するとすれば、我々は我々の存在に満腔の呪詛を加へなければならぬ。」という感覚は、社会主義国家への嫌悪の感覚を披瀝したものだ。

芥川龍之介「雑筆」(不朽)には、ゾラがその文体の範をルソーの華やかな文体に学びヴオルテエルの簡潔な文体を学ばなかった為に自己の文章が、早晩時代遅れになるという認識を持っていたという挿話を載せる。吉田精一脚注も最近の吉田司雄注解も出所を特定していないようだ。芥川龍之介は、「仏蘭西文学と僕」(「中央文学」大正十年二月)では自分の仏蘭西文学の守備範囲は十九世紀以降の作家に限定されていると感想を述べ、これは文壇の常識的な知識範囲でもあるとも言う。「文壇はラブレエの影響も、ラシイヌやコルネイユの影響も受けてゐない。唯おもに十九世紀以後の作家たちの影響を受けてゐる。」(「仏蘭西文学と僕」)と言い、古いところはルツソオやヴオルテエルまでであると言っている。

１２(十二)

僕は寒い日の午後、自分の万年筆を盗んだ河童を発見する。「その河童が僕の万年筆を盗んだことに気がついたからです。」(四)、この痩せた郵便配達夫のグルツクは、子供の玩具として窃盗を成した事が判明する。巡査は、尋問した窃盗犯である郵便配達夫を刑法第千二百八十五条『如何なる犯罪を行ひたりと雖も、該犯罪を行はしめたる事情の消失したる後は該犯罪者を処罰することを得ず』(十三)で無罪放免する。この場面には、義兄西川自殺が反映している。具体的には親族会議の結果、経済的な負担と甥の葛巻義敏の養育が芥

川龍之介の義務になる。「火災保険、生命保険、高利の金などの問題がからまるのだからやり切れない。」(「佐佐来茂索宛書簡」昭和二年一月三十日)、この種の実体験から前記の刑法による無罪放免の場面が創出された。作中の裁判官ペツプの発言が成された訣である。「親だつた河童も親である河童も同一に見るのこそ不合理です。」(十二)という発言が、その趣旨である。

「論語」(「子路第十三」)には、法規による人民統治より人知主義による統治を是とする孔子の発言がある。共産主義社会を彷彿させる絶対主義を賞賛する葉公(しょうこう)に対して、社会の無秩序を思わせる自由社会にこそ人間の真の幸福があると孔子が答える場面である。(葉公)「吾が党に躬(み)を直くする者あり。其の父羊を攘(ぬす)む。而(しか)して子之を証せり。」(孔子)「吾が党の直き者は是に異なり。父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直きことは其の中に在り。」という条である。芥川龍之介は、河童国をどちらに属する国家として設定したのであろうか。膨大な法規は、さながら共産主義国家を思わせるものがある。しかし、その法規の運用は臨機応変で事実上無秩序を思わせるものがある。膨大なる刑法上の法規は、事実上は何も規則が存在しないもののようである。現在でも共産主義治世下で問題なのは、膨大な法規ではなくてその運用である。河童国をある種、理想的な放任主義国家として作者は認定しているようである。窃盗の犯人である郵便配達夫であるグルツクは、罪科の消失している事を認識していて貧相な体格に関わらず傲然として巡査の前に進みでる。「腕を組んだまま、如何(いかが)にも傲然(がうぜん)と僕の顔や巡査の顔をじろじろ見てゐるのです。」(十二)、この記述は「蚊(か)のやうに痩(や)せた体」(四)の郵便配達夫が、国家によりその放任主義で保護され安全圏にいる事を示している。

法規以外の話題は、罪科の結果の刑罰である。河童は、人間よりも神経作用が繊細である為に罪の意識の自覚で死に至るという説明である。裁判官ペツプに拠れば、「・・・・・・唯その犯罪の名を言つて聞かせるだけです。」「死にますとも。我々河童の神経作用はあなたがたのよりも微妙ですからね。」(十二)という説明である。しかし、河童全体が人間よりも神経が繊細とは言えない。「河童」執筆時の芥川龍之介が、私的あるいは公的な困難に直面して逃避の意味で河童社会を記述しながら、自身の私的な窮状が作品世界に介入している箇所が散在する。さらに典拠になった「ガリヴァー旅行記」により著者であるスウィフトのアングロ・サクソン的な発想も無意識裡に入り込んでいるようだ。

河童社会の頂点に位置する独占資本家である社長ゲエルは、『貴様は盗人だ』という社会主義者からの誹謗讒言で心臓麻痺を起して死に瀕する事になる。さらに或辯護士は、人格否定の言葉、蛙に議せられ自殺に追い込まれている。(注7) しかし、学生ラツプは淫乱な雌河童に追跡されて逃げ回る場面がある。「大変だ！とうとう僕は抱(だ)きつかれてしまつた！」(六)、彼は、厚化粧の年増の女河童の性的な標的になり、性病で嘴が腐って落ちてしまう。さらに大量解雇になった四五万匹の河童を職工屠殺法で殺害し、その肉を食用に供するなどは到底河童社会が人間社会より繊細かつ高等社会とは言い切れない。つまり、「河童」全体を有機的に統一する程の見識を著者は持っていなかった。自身の切実な欲求が突出し、あるいは典拠の作品からの無意識裡の作品関与が見られる。(注8)

１３(十三)

詩人トツクの自宅から聞こえた一発の銃声、この辺から「河童」の記述は芥川龍之介が直面する現実の諸問題を扱っている。哲学者マツグの居間に集って河童社会に就いて評論的に語り合う裁判官ペツプや医者のチヤツクと硝子会社社長ゲエルそれに僕は、一気に本体を現す事になる。

> トツクは右の手にピストルを握り、頭の皿から血を出したまま、高山植物の鉢植ゑの中に仰向(あふむ)けになつて倒れてゐました。(十三)

詩人トツクの拳銃自殺のこの場面は、言うまでもなく「若いウェルテルの悩み」(「Die Leiden des jungen Werthers」)の主人公ウェルテルの拳銃自殺を模倣した場面である。遺された詩編は、「いざ、立ちて行(ゆ)かん。娑婆界(しゃばかい)(注9)を隔(へだ)つる谷へ。／岩むらはこごしく(「けわしく」)、やま水は清く、／薬草の花はにほへる谷へ。」という断片である。この詩編を一瞥した哲学者マツグは、ゲエテ「ミニヨンの歌」の模倣であり、詩人トツクは疲労困憊の極みにあったと断定する。

「これはゲエテの『ミニヨンの歌』(注10)の剽窃(へうせつ)で

すよ。するとトツク君の自殺したのは詩人としても疲れてゐたのですね。」(十三)と云うのが哲学者マツグの断定である。遺骸となって横たわる詩人トツクの横で参集の知人達の立ち振る舞いは、さながら自分の死後の周辺の人達を生前の芥川龍之介が眺望するようである。野心家の音楽家のクラバツクは、死んだトツクに一瞥も与えず遺稿となった詩片を凝視して創作意欲の湧き上がるのを待つ。「しめた！すばらしい葬送曲が出来るぞ。」(十三)、この音楽家クラバツクの態度は「枯野抄」(「新小説」大正七年十月)で漱石追悼号の売り上げを気にする門下生を冷酷に描いた芥川龍之介の再現である。裁判官のペツプと社長のゲエルは、傍観者の無責任を発揮して世間話に興ずる。しかし河童社会で異端者であった僕は、悲嘆に暮れる愛人と幼い幼児の無邪気な行為に涙を抑えかねる。「僕が河童の国に住んでゐるうちに涙と云ふものをこぼしたのは前にも後にもこの時だけです。」(十三)。ここには自身の死後に取り残される夫人と子供に対する芥川龍之介の切実な思いがある。これら傍観者の利己主義の中で哲学者マツグだけは、詩人トツクの自殺を個人の弱点に帰すことなく河童社会の病原として自覚する。「我々河童は何と云つても、河童の生活を完うする為には、・・・・・・」「兎に角我々河童以外の何ものかの力を信ずることですね。」(十三)、こうして芥川龍之介は哲学者マツグの言に託して自己の死後の民族的な課題を問題視している訣である。個人の煩悶、苦悶を解決に導くのは人格の否定と党の規律に属する事であると、芥川龍之介死後「敗北の文学」(「改造」昭和四年八月)で共産党の教祖は、厳かに宣言した。教祖が宣言した共産党の統制経済の国家体制は、実現しなかった。共産党の敗退以後に北一輝「日本改造法案大綱」に拠る天皇を戴く共産主義国家樹立の企ても実現を見なかったが、日本は事実上革新官僚の支配する統制経済国家、共産主義国家になって敗戦を迎える。

敗戦後米軍占領下で再度個人の尊厳を重視する社会になり、芥川龍之介が危惧し心労で倒れた自由主義の社会になり、再度芥川龍之介の煩悶は現代の課題になる。しかし、教祖が「敗北の文学」で宣言した人間の精神を統制する遺産は、日本人の精神史に巨大な痕跡を残した。そして、それは過去の日本人の遺産ではない。未知なる未来は、個人で予想し実践するには余りに不確定要因に満ちている。教祖の宣託により、予見を与えられてのみ人間は信念を持って生きられる。日本社会は、自由に生きる個に対して情け容赦のない譴責を与えるが、組織に属する者に対してその咎を問うことはない。組合に属する労働者は、勤務中の傍若無人を咎められることは無いし、赤化思想で武装した日本人は自己の行動を咎める者を殲滅する事に神の恩寵を覚えるだろう。

１４(十四)

詩人トツクの自殺に誘発された哲学者マツグの発言で僕は、河童国の宗教に就いて学生ラツプに問い質す。河童世界第一の宗教は、「生活教」(「Quemoocha」)である。この語源説明は、動詞「quemal」(「生きる」「飯を食つたり、酒を飲んだり、交合を行つたり」)の意味である。「cha」は、英語の「ism」の意味である。生活教の実態は、これでは詳細は不明であるが、近代教の大寺院の描写から芥川龍之介が言おうとする河童を支配する宗教、生活教の本質が明らかになる。生活教、別名近代教の大寺院は以下のようなものだ。

> 僕はこの大寺院の前に立ち、高い塔や円屋根を眺めた時、何か無気味にさへ感じました。実際それ等は天に向つて伸びた無数の触手のやうに見えたものです。(十四)

近代教の大寺院のドームの描写は、独逸ケルンの大聖堂の概観を模写したと思われる。河童国の近代教とは、それはすなわち地に天に無限の征服欲を顕示しているゲルマン精神の象徴である。広大な亜米利加大陸を征服し、亜細亜諸国にまでその触手を伸ばした拡張精神である。この近代教の大寺院には、殉教者の胸像が陳列されている。その胸像の主を順次羅列すれば、以下の如くである。(①「ストリントベリイ」②「ニイチエ」③「トルストイ」④「国木田独歩」⑤「ワグネル」⑥「ゴオガン」⑦「第七の龕の中にあるのは・・・・・」(注11) これらの生活教の聖殿に安置されているのは、基督教に対する反逆者であり、その行為により生前は精神の安住の地を見出せなかった連中である。近代教の大寺院の殿堂にその胸像が安置される第七番目の殉教者は、誰か。言うまでもなくそれは生活教に違和感を抱き、河童人生の天寿を全う出来

ないで今さっき拳銃自殺を遂げた詩人のトツクの胸像であるべきだ。あるいは芥川龍之介自身の胸像の可能性がある。

「・・・・・・我々信徒の礼拝するのは正面の祭壇にある『生命の樹』です。『生命の樹』には御覧の通り、金と緑との果がなつてゐます。あの金の果を『善の果』と云ひ、あの緑の果を『悪の果』と云ひます。・・・・・・」(十四)

この場面は、言うまでも「旧約聖書」(「創世記」)の変形である。これはさらに「創世記」を芥川龍之介流に書き換えられて以下のような文言になる。「・・・・・・我々の神は一日のうちにこの世界を造りました。(『生命の樹』は樹と云ふものの、成し能はないことはないのです。)のみならず雌の河童を造りました。すると雌の河童は退屈の余り、雄の河童を求めました。・・・・・・・・」(十四)、全能の神の機能は樹に備わっているという設定である。天地創造の神を模倣したこの場面は、さながら「猿の惑星」の猿の宮殿の祭壇を思わせるものがある。「河童」典拠となった欧州作家の作品は、「猿の惑星」の原作者が依拠した作品と同一だった可能性がある。近代教の大寺院にその胸像が安置されている殉教者たちの一人トルストイの挿話「この聖徒も時々書斎の梁に恐怖を感じたのは有名です。」(十四)

文豪のこの挿話の出所は何であろうか。私見ではこの挿話は作品「玄鶴山房」(五)の反映であり、「追想芥川龍之介」(三十五)の回想では芥川龍之介自身のものである。しかし、博学多才の芥川龍之介の記述には依拠した典拠がある筈である。

学生ラップ同伴で近代教の大寺院を後にする。振り返ると寺院は蜃気楼に似て不気味な姿で背後に聳えていた。この箇所は、ゲルマン民族以外の者がケルンの大聖堂登攀後に立ち去る時に誰でも感じる威圧感である。地球上の未開の地を悉く征服した後、彼等に残されているのは宇宙空間に足跡を残す事だけである。「大寺院はどんより曇つた空にやはり高い塔や丸屋根を無数の触手のやうに伸ばしてゐます。何か沙漠の空に見える蜃気楼の無気味さを漂はせたまま。」(十四)、僕は河童世界の近代教の大寺院を思わず振り返る所作を取る。この場面は、明らかに近代技術進歩に対する芥川龍之介の恐怖の心情の反映であろう。

１５(十五)

この時期に芥川龍之介が興味を持っていた現象、心霊学が問題にされている。詩人トツクの自宅に現われる詩人の霊と交感して、死者の意思を確認する場面である。ここにも死後を意識した芥川龍之介の深層心理を窺う事が出来る。詩人トツクの霊魂に憑依しその心中を語るのは、メデイアム、ホツプ夫人で同伴は心霊協会々長ペツクと協会々員十七名である。この辺は、近代心霊主義が欧州からの輸入品である事が関係している。夫人に憑依した詩人トツクの関心事は、第一に死後の文学的な名声である。第二は同棲していた愛人の行方である。第三は子供たちの所在である。最後に自宅の状況の質問が来る。この詩人トツクの霊魂が憑依の西洋夫人により語る関心事は、芥川龍之介の生前の最大の関心事であり、順序もこの通りであろう。

「心霊科学研究会」「相対研究会」等は、生前の芥川龍之介が多大の興味を持っていて一説では、秘密会員であったとも言われている。詩人トツクの霊魂が憑依した夫人と心霊学協会の十七名の会員との一問一答は、軽快さと諧謔のやり取りの中にこの時期の芥川龍之介の切実な問題を内包している。霊魂となった詩人河童の口を借りて芥川龍之介は、生前の松尾芭蕉が、著述の出版を成し得ることなく死後に一世を風靡した事を語っている。それに続いて文壇の評判を極端に気に病んだ芥川龍之介は、自己の弱点を披露して笑いの対象にしている。「古池や蛙飛びこむ水の音」を「蛙」を「河童」に変えるべきとの詩人河童の自家薬籠中の主張、牽強付会に対して責任者が譴責をする場面を挿入させる。「会長ペツク氏はこの時に当り、我等十七名の会員にこは心霊学協会の臨時調査会にして合評会にあらざるを注意したり。」(十五)。言うまでもなくこれは芥川龍之介作品を発表と同時に舌頭に上げて容赦ない批判を浴びせた「新潮合評会」の古参の私小説系統の玄人筋の先輩に対する揶揄である。絶望的な作品にあって軽い諧謔で笑いを誘う作風は、後年三島由紀夫に伝わりさらには手塚治の作品にも散在する。こうした諧謔と笑いに敏感に反応する事に読者の喜びもあると言えるかも知れない。

霊界での交遊関係は、どうかという心霊学協会

員の質問の対して著名な自殺作家を挙げて現在の社交生活を披露する。「（前文省略）その著名なるものを挙ぐれば、クライスト、マインレンデル、ワイニンゲル・・・・・・」「（前文省略）自殺を辯護せるモンテエニユの如きは予が畏友の一人なり。唯余は自殺せざりし厭世主義者、―ショオペンハウエルの輩とは交際せず。」（十五）(注12) こうしたやり取りの後で詩人トツクの霊魂が憑依した夫人と心霊学協会の十七名の会員との問答は、芥川龍之介のこの時期の切実な問題であった死後の文学的名声、妻子の事に及ぶのである。憑依が覚醒する直前に自殺した詩人は気がかりな発言を遺す。「予は予の机の抽斗に予の秘蔵せる一束の手紙を―然れどもこは幸ひにも多忙なる諸君の関する所にあらず。」（十五）。これは「文藝的な、余りに文藝的な」（十八）の記載事項である「メリメエの書簡集」（「誰かわからない女に宛てた戀愛書簡集」は死後発表されたもので、一八四〇年から没年までにわたってある女性にあてたものが収録されている。生涯独身だったメリメエの一面がうかがえる資料である。四〇年間にわたって三三二通を収めている。）を想起させる一文である。

この関連で類推すれば詩人たる河童トツクの残した詩稿の一部である。生前の彼は、この書簡により幾つかの詩編を成すつもりでいながら思いを残したという事である。以上のやり取りの果てに、詩人トツクの霊魂が憑依した夫人は、覚醒して霊界と心霊学協会の会員諸氏との交感は終わる。「（尚又我等の信頼するホツプ夫人に対する報酬は嘗て夫人が女優たりし時の日当に従ひて支辨したり。）」（十五）という但し書きを付帯事項として記述している。つまり、霊界から自殺した詩人トツクの霊魂を呼び出し、憑依現象を成した夫人の行動をすべて女優としての演技と看做して一件落着させた訣である。

１６（十六）

河童国に飽いた僕は、僕を河童国に引率した漁夫のバツクに人間界への帰還の希望を述べる。彼は僕の為に或老河童を紹介してくれるが、その老河童の容貌は少年のそれである。

「お前さんはまだ知らないのかい？わたしはどう云ふ運命か、母親の腹を出た時には白髪頭をしてゐたのだよ。それからだんだん年が若くなり、今ではこんな子供になつたのだよ。けれども年を勘定すれば生まれる前を六十としても、彼是百十五六にはなるかも知れない。」（十六）

老年でありながら少年の容貌を持つ河童の造型を芥川龍之介は、何により示唆を受けたか。アナトオル・フランス「エピクロスの園」（「人生」岩波文庫）に同趣旨の一文がある。大塚幸男解説は、「エピクロスの園」に共感した大仏次郎の随筆を紹介している。「私は造化の神さまにお願いする。人間の一生をあべこべに進めて頂けないものだろうか？時計を巻き戻すように、生涯を終りから始める。生れる時、人は持っている定命の最後から始める。・・・・・・」（「砂の上に」）。さらに大塚幸男解説は伊太利亜作家ガブリエレ・バルディーニの長編小説「風の色の思い出」（一九七三）を紹介して同趣旨の作品であると言っている。同じような一文を吉行淳之介も言っていたが、この種の願望が生れるのは女に就いて深刻な煩悶を抱いた時らしい。「河童」（十六）のこの項を執筆する芥川龍之介も吉行淳之介も同様に人生の半ばで深刻な女性問題を抱えていた。若き頃の異性に対する渇き、枯淡の境地に遊びたいという思いを抱いていた吉行淳之介は、川端康成「山の音」で老年の性的な渇きを一読して声を失ったと感想を述べている。「（前文省略）従つて年よりのやうに慾にも渇かず、若いもののやうに色にも溺れない。兎に角わたしの生涯はたとひ仕合せではないにもしろ、安らかだつたのには違ひあるまい。」（十六）(注13)

若い風貌の老河童と僕の会話は、直接に芥川龍之介生誕時の問題に帰着して行く。この時期の彼の最大の関心事である生誕とその帰着である死の問題に関心が行く。老河童は、普通の河童のような青年期の異性に対する渇きを覚えず、老年期になっても迫り来る死の戦慄も覚える事はない。この辺の記述は執筆時、青年であった芥川龍之介の考える老年の認識が反映している。「『出て行かれる路は一つしかない。』（一文省略）『それはお前さんのここへ来た路だ。』僕はこの答を聞いた時になぜか身の毛がよだちました。」（十六）(注14)

この前後の文脈は、生誕の時空に帰還しなくてはならぬという宣言で僕が、戦慄する場面である。青年の風貌の老河童は、他の河童同様河童社会を自覚して誕生した。しかし、他の河童が長ずるに

及んで性的な渇き、老いの不安を覚える事に違和感を覚え人生を逆に生きる事で不安概念を逃れているのである。この特異な河童存在は、「河童」典拠の「ガリヴァー旅行記」に依拠しているだろう。「『唯わたしは前以て言ふがね。出て行つて後悔しないやうに。』『大丈夫です。僕は後悔などはしません。』」(十六)、この場面は先の意味不明の会話に通じるものがある。「『然らば君は君自身の自殺せしを後悔するや？』『必しも後悔せず。予は心霊的生活に倦まば、更にピストルを取りて自活すべし。』『自活するは容易なりや否や？』」(十五)という場面である。

厭世自殺を遂げた詩人のトツクは、霊媒を介して自殺した事を後悔してはいないが心霊的生活に飽きたら再度自活すると言う。霊媒の言う自活とは何か、自殺の瞬間に立ち戻り時間を取り戻すの意、つまり、再度自殺以前の状態に戻るの意味か。芥川龍之介流永劫回帰を意味している場面であると理解を及ぼすと先の河童国から脱出し、人間界に立ち戻る事は河童国を捨てる事で日常生活の不便を託つので長老は事前に確認をした訣であろう。(注15) 河童国の長老が、僕の人間界に帰還する事に危惧を覚えたのは慣れ親しんだ世界を捨てて新しい生活を送る気苦労を気遣っただけの事であろう。「河童」と典拠を同じくすると思われる「猿の惑星」では、猿の長老は真実を知る事は、人類滅亡の現実を知る事は不幸の原因になると言って地球に帰還した最後の知的人間に対して前進する事を阻止しようとする。

１７(十七)

河童国に迷い込んで再度人間界に立ち戻った僕によれば「或精神病院の患者、―第二十三号」「東京市外××村のＳ精神病院」(「河童」序)に入院中の患者の話に連結する。人間社会に帰還した僕を苦しめたのは第一に人間特有の匂い、つまり体臭である。第二に人間の持つ容貌、とりわけ鼻に違和感を覚える。これなども異国で生活して帰国した日本人が、現実の祖国の姿に違和感を覚えるのと似ている。欧州からの帰国者は、日本の市街に廃墟を感じて愕然とするであろう。芥川龍之介の直感は、第一に臭いに反応したことであるが、これは半年の支那生活の後に祖国に帰還した芥川龍之介自身の実体験であろう。

人間界で生活して違和感を覚えて河童国に再度入国しようとした僕、客観的には精神分裂症状の再発で警官に保護される。この時の僕の境地は、「卻つて荓州を望めばこれ故郷」の心境である。精神病棟に隔離され監禁状態に置かれた僕、「或精神病院の患者、―第二十三号」の僕に重症の精神分裂病の症状が再発したのである。自分が帰還した人間社会に違和感を覚え、河童社会に郷愁を抱く僕の前に懐かしい河童社会の仲間達が、見舞いに来てくれる。最初に現われたのは僕を河童世界に誘導した漁夫のバツグである。彼は本来の敏捷性に物を言わせて梓川の谷に姿を現した時と同じく、東京市外のＳ精神病院に現われた訣である。僕は客観的に観察すれば、精神分裂症状の軽い時に漁夫のバツグを見るという設定である。そして症状の重症になった時には、河童国で別れた学生のラツプや哲学者のマツグに会い、さらには硝子会社社長ゲエルに音楽家のクラバツクにも遭遇する。それは月明かりの深夜に限られている。つまり、Ｓ精神病院の患者は深夜で月明かりの夜に症状が悪化する訣である。

症状が悪化した月明かりの夜、訪問客の一人であった音楽家のクラバツクはＳ精神病院の入院患者である僕の為に黒百合の花束を持参して来る。机の上の黒百合の花束が、それですと彼は、作者の分身であるらしい僕に言う。「(僕は後を振り返つて見た。が、勿論机の上には花束も何ものつてゐなかつた。)」(十七)、さらに河童国で自殺した詩人トツクの全集を哲学者マツグが持参してくれた。これはトツク全集の一冊ですが、こう言って彼Ｓ精神病院の患者は、作者の分身である僕に一冊の電話帳を読んで聞かせる。「(彼は古い電話帳をひろげ、かう云ふ詩をおほ声に読みはじめた。)」(十七)という設定である。

Ｓ精神病院の患者が読み上げる詩人トツクの詩とは、以下の如きものである。作者の分身である僕は、「或精神病院の患者、―第二十三号」の読み上げる詩を書き取っている。

「―椰子の花や竹の中に／仏陀はとうに眠つてゐる。／路ばたに枯れた無花果と一しよに／基督ももう死んだらしい。／しかし我々は休まなければならぬ／たとひ芝居の背景の前にも。(その又背景の裏を見れば、継ぎはぎだらけのカンヴアス

ばかりだ？）—」(注16) 仏陀の先導した悟りも、基督の掲げた天国の道も何の役にも立たない。私は、もう全ての華やかな一時的な飾りや虚飾に飽きた、永遠の休息に入りたいの意である。これは、自殺した河童国の詩人の遺稿であると同時に作者自身の胸中であろう。河童国の権威の象徴であった裁判官のペツプは、解職後に発狂して今は精神病院に入院しているという情報が齎される。「僕はS博士(はかせ)さへ承知してくれれば、見舞ひに行つてやりたいのですがね。・・・・・・」(十七)、芥川龍之介の認識では人間界で発狂した僕—第二十三号と河童国の精神病院に収容された裁判官ペツプは、正気だということであろう。

精神分裂症の専門書を濫読する芥川龍之介を精神科医斉藤茂吉は禁じたが、「河童」創作ではこれらの知識が有効に作用している。肉体と精神の崩壊寸前で芥川龍之介は、典拠となった「ガリヴァー旅行記」に匹敵する作品を残し得た。彼の天才は、肉体が頑強で精神が強固であった時は才人としての創作を成したが、晩年の衰弱した時期程の鬼気に満ちた作品を作り得なかった。「精神分裂病では自己の内界と、自己を取り囲む外界とのあいだにガラスの隔壁のようなものができてしまいます。」(「座談会明治文学史」)と勝本清一郎が、北村透谷の精神病理学の事跡で説明している。外部との接触に違和感を覚えた芥川龍之介は、こうした精神分析学の手法を駆使して自己分析を成し、結果を架空の動物河童に仮託して象徴的に描いて見せた。戦慄と恐怖の中に諧謔、皮肉、笑いを包んだ鬼才の名に相応しい作品と言える。

(注1) 三島由紀夫「天人五衰」(十八)で安永透の面前で東大生の古澤が語る死の形而上学、唯一許される自殺の例である。自分を猫だと信じた鼠の自殺であるが、彼がある日偶然にも実物の猫に遭遇して食われてしまう身辺の危機に直面するのである。鼠は自分が猫であるという信念を守る為に、猫に食われて鼠の本体を披瀝しない為に自殺する。自己の政治的な信念を死を持って守る話である。下世話(げせわ)の話に転化すれば、命がけで君を愛すと言って相手に真意を疑われた場合に死んで見せる訣である。「・・・・・・たとへば、自分を猫だと信じた鼠の話だ。なぜだかしらないが、その鼠は、自分の本質をよく點檢してみて、自分は猫にちがひないと確信するやうになつたんだ。そこで同類の鼠を見る目もちがつて來、あらゆる鼠は自分の餌にすぎないのだが、ただ猫であることを見破られないために、自分は鼠を喰はずにゐるだけだと信じた」。実物の猫に遭遇して食われる危機に直面した鼠は、必死の弁明をする、自分は外形は鼠だが実は、信念において猫だから猫である君は私を食う事など出来ない筈だ。猫は、信念で猫であると主張する鼠の存在を嘲笑しその自己証明を求めると鼠は、洗剤の盥に飛び込み自殺する。「鼠はかたはらに白い洗剤の泡を湧き立たせてゐる洗濯物の盥の中へ、いきなり身を投げて自殺を遂げた。猫は一寸前肢を浸して舐めてみたが、洗劑の味は最低だつたから、泛んだ鼠の屍はそのままにして立ち去つた。猫の立ち去つた理由はわかつてゐる。要するに、喰へたものぢやなかつたからだ。」、この小事件により猫は鼠の存在に疑念を持つ事はなかつた。東大生の家庭教師古澤は、異常な知能指数の数値を持つ受験生に向かって語りかける。「ところで鼠の死は世界を震撼させたらうか？」猫は、自殺した鼠の事を忘れて眠り込んでしまった。賢い少年の安永透は、東大生の家庭教師に向かって返答する。「權力のことを言つてゐるんですね。」と。「豊饒の海」(「天人五衰」十八)のこの場面は、著者の自決の理由説明の意味あいがある。三島由紀夫にこの比喩談を着想させ示唆を与えたのは、芥川龍之介「河童」)(十二)に登場する自殺した弁護士の挿話である。義兄西川豊の自殺を自己証明の為の自殺と認識している芥川龍之介の理解は、以下の如くである。「一己(おれ)は蛙かな？蛙ではないかな？と毎日考へてゐるうちにとうとう死んでしまつたものです。」「それはつまり自殺ですね。」、私は今まで芥川龍之介に就いての作品論を多く展開、著述してきたが芥川龍之介作品程後世の作家の創造力に示唆を与えた例はないという感想を持つ。遠藤周作、三島由紀夫、堀辰雄、太宰治等の作品が依拠した芥川龍之介作品の具体的な細部については、相当数私は今まで指摘してきている。

余談を記述すると「天人五衰」(「新潮」昭和四十六年一月)、つまり三島由紀夫自決の一ヵ月後に発表された「豊饒の海」最終場面には日本最初のノーベル文学賞受賞に輝き世間の脚光を一身に浴びていた師川端康成を揶揄した場面があり、多くの文学愛好者を驚かせたのは記憶に新しい。昭和五十年、八十歳の老人になった本多繁邦は老後の楽しみの為に痴漢行為の

常習者になっていた。彼は、深夜の神宮外苑の恋人の森に積極的な痴漢行為の為に夜な夜な出没する。その夜の心のときめきを三島由紀夫は、次のように記述した。「色情のかげもないこの整々たる廣場に佇んで、本多はふと、自分が胎藏界曼荼羅の只中に立つてゐるやうな心地がした。」、この後に師の川端康成に依拠したと思しき胎藏界曼荼羅の説明が続く。三島由紀夫は、痴漢常習者となった八十歳の老人本多繁邦を川端康成に擬えて報復した事になる。二人の作家の微妙な師弟関係に就いては、広く知られていたらしくて松本清張「文豪」(「葉花星宿」)で尾崎紅葉と泉鏡花との師弟関係を論じながら暗示する形で二人の微妙な関係に就いて書いている。

さらに「天人五衰」(三十)の「豊饒の海」最終場面には死期の近い事を予期した本多繁邦が六十一年ぶりに奈良の月修寺をよろめきながら訪問する場面がある。学習院高等科時代の親友松枝清顕が、病を押して奈良帯解の駅から喘ぎながら歩いた道である。よろめきながらたどり着いた月修寺の門前に一本の合歓の木があった。そこを目指して老残の本多繁邦は、最後の力を振り絞って歩き続ける。この場面が、三島由紀夫が一度会食して縁なく別れてしまったさる高貴な夫人に捧げたある種の思いの表出であるという指摘である。「檜林がやがて杉林に領域を譲るあたりに、一本孤立した合歓があつた。杉の剛い葉の間に紛れ込んだ、午睡の夢のやうにあえかな、その柔らかい葉叢が、タイの思ひ出を本多に運んでくると思ふ間に、そこからも一羽の白い蝶が翔つて、行手へ導いた。」(「天人五衰」三十」)。

(注2) 村松梢風「近代作家伝」を引用しながら素質の違う志賀直哉に脱帽する最晩年の芥川龍之介の衰退振りに天才の末期を見ている。青年期師の漱石から訓示され「文壇をあいてにしては駄目だぞ」と言われ自身も澄江堂サロンで後輩に対して「君、文壇を相手にしちや駄目だよ」と言いながら、徹頭徹尾文壇の評価を気にした芥川龍之介の処世の拙さを批判している。文壇の二、三の批評家の言を極度に恐れた芥川龍之介に比べて三島由紀夫は、自著の売れ行きを気にした。遺稿「小説とは何か」(「新潮社」昭和四十七年三月)の実作者としての小説鑑賞法を褒めている。ただ文壇登場のきっかけになった「仮面の告白」(「河出書房」昭和二十四年七月)執筆動機になったと思しき太宰治「人間失格」(「展望」昭和二十三年六月—八月)とさらに先駆的にこの作品の創作契機になったと思しき芥川龍之介「河童」に就いての言及が無いと松本清張は、訝っている。

松本清張は三島由紀夫と一度だけ直接遭遇した。銀座「浜作」で会食中に会う。家族連れの三島由紀夫から丁寧な挨拶を受けて二人は、別れる。芥川龍之介は、自分から丁寧な挨拶を送り帰宅後に後悔したが、三島由紀夫も私(松本清張)に初対面の挨拶を送り帰宅後に後悔したかどうか、という感想が記されている。これには些か説明が必要だ。九州小倉で切迫した生活を送りながら臨時収入があると松本清張は、単身高級料理店に通ったそうである。銀座「浜作」での単身の会食もその延長の密かな楽しみであったろうか。芥川龍之介の例は、有島生馬「嘘の果」(「開放」大正八年六月)に就いて「大正八年六月の文壇」(「大阪毎日新聞」大正八年六月)で批判した直後に有島生馬に直接遭遇し、咄嗟に慇懃無礼な挨拶をして後で後悔した事を念頭に置いている。

三島由紀夫からの懇切丁寧な挨拶を受けた折の感想も解説を必要とする。「日本の文学」(中央公論社)全集編集顧問に谷崎潤一郎、川端康成、ドナルド・キーン等と就任した折に全集売り上げの為に松本清張「点と線」(「光文社」昭和三十三年二月)収録を懇願した編集部の要請を拒絶した経過を知る必要がある。その文学をその経歴を蛇蝎の如くに嫌った松本清張に丁寧な挨拶をして、帰宅後の芥川龍之介のように憤怒の為に女中が用意した湯飲みを、三島由紀夫の場合はグラスを縁石に投げつけたであろうか、という松本清張側からの素朴な疑問である。

従来の文壇を学閥を破壊することに貢献した松本清張は、創作中で繰り返して文学に毒された万年文学青年を揶揄、嘲笑している。古くは代作で虚名を保った菊池寛、久米正雄さらに終日文学を語りながら作品的な成果は、「芥川龍之介」(「筑摩叢書」昭和四十二年八月)程度しかない宇野浩二、志賀直哉等である。既成文壇に対する皮肉は実作では、「渡された場面」(「新潮社」昭和五十一年十一月)等でさらに創作者と批評家との腐れ縁に就いては、「文豪」(「正太郎の舌」)の作中で露骨に批判されている。排除されているのは、所謂伝統的、日本的な「私小説」である。「文豪」(「葉花星宿」)で描かれたのは勃興する天才作家泉鏡花と凋落する師匠格の尾崎紅葉の新旧交代の劇である。「師匠が死ねば、弟子は頭上が爽快に晴れ

る。新時代の到来をよろこぶのは、何も部外者の田山花袋だけではない。しかし、己の虚位を支えてくれたたった一人の『弟子』に先立たれた『師』の場合、老残凋落の前に自裁するしかあるまい。面従服背を寸毫も他人に気取らせることなく、隠微、皮肉な献身で仕えた『弟子』のほうがはるかに『悪人』だったと彼が知っていても。」(「葉花星宿」)

「文豪」(「葉花星宿」)は、徹頭徹尾明治の文豪尾崎紅葉とその内弟子である泉鏡花の星宿位置の逆転の構図に記述しながら最終的には、ノーベル賞受賞の栄誉を担った川端康成と三島由紀夫の師弟関係を見ているのである。松本清張には川端康成「伊豆の踊子」(「文藝時代」大正十五年一月)に挑戦した作品「天城越え」(「サンデー毎日」昭和三十四年十一月)がある。周知のように「伊豆の踊子」は、第一高等学校の制服制帽の一学生が伊豆の旅に出て、その制服の威力で楽しい思いをする話である。旅芸人の踊子に寄せる淡い恋心とは対照的に、「天城越え」の方では道連れになった娼婦に寄せる性的な欲望が踏みにじられ、衝動的な殺意に変貌する話である。貧しいどん底の生活を捨て出奔する私の唯一心を寄せた娼婦に対する恋情が、殺意に変貌する作品を世に出す事で後年「日本の文学」(「中央公論社」)全集に自作の収録を拒否する文壇エリート、第一高等学校、東京帝国大学の知的集団に事前の報復をしたのかも知れない。

(注３) 成功あるいは不成功は、神秘の世界に属する。性情的には合理主義者であった幸田露伴は、運命を過酷にしない為の方法論を展開している。幸田露伴「努力論」に拠れば、惜福と分福である。前者は幸運をあるいは所有する富を一気に使い切らずに運命の手に委ねる事である。そして後者は自己の富を関係のない第三者に分配することである。冥々茫々たる未来に利権を分散する事を勧め「雪陰で饅頭を食う」吝嗇を戒めている訣である。しかし、こうした伝統的な日本人の伝統規範は、敗戦とその結果蔓延したイデオロギー教育で雲散霧消してしまった。表面的には、惜福と分福を装うもそれは組織内で生き残る為の演技であって、茫々たる第三者の運命に凶器を潜めるのが日本人の品性になってしまった。神秘主義者芥川龍之介と違い、合理主義者幸田露伴は神秘の世界に属する運命を過酷にしないために合理的な思考で神秘の世界に属する冥々茫々たる未来に向かって手段を講じたのである。しかし、芥川龍之介の場合肉体と精神の衰弱の極みで鋭角的かつ天才的な表現手法を駆使した訣である。言葉を変えれば神秘的現象を自己の精神の内部から雲散霧消しない為に健康を犠牲にして自らの表現能力を守ったと言える。

(注４)「ボオドレエルは白痴になつた後、彼の人生観をたつた一語に、一女陰の一語に表白した。」の断章に就いて「芥川龍之介『河童』注解」は、その依拠する所は不明であるとしている。吉田精一脚注「芥川龍之介全集類聚」には、前記箴言に就いての脚注はなくボオドレエルのみ脚注に付す。(「ボオドレエル Baudelaire〔1821~1867〕。フランスの象徴派の詩人。晩年発狂した。芥川は『人生は一行のボオドレエルにも若かない』〔或阿呆の一生〕という。」)、最新の岩波「芥川龍之介全集」(第十四巻)注解は以下のようなものである。「ボオドレエル Charles Baudelaire〔一八二一―六七〕。フランスの象徴派の詩人。一八六二年に梅毒による症状が顕著になり、『痴呆の翼が頭上を羽ばたき過ぎるのを感じた』(「日記」)。六六年ベルギーに滞在していたボードレールは、ナミュールのサンルー教会の石畳の上に倒れ、右半身不随、失語症となって脳軟化症の症状を呈し、翌年没した。病院ではcre'nom(畜生)とばかり呟き続けたらしいが、『女陰』の語については未詳。」

「彼の人生観をたつた一語に、一女陰の一語に表白した。」の典拠は何か。明瞭な出所はある筈である。流行作家山本有三に文藝講演を依頼した事が機縁で私生活に密着した高橋健二は、引越し協力への謝恩を兼ねて一夏を軽井沢に過ごして芥川龍之介と面識を得る。避暑地軽井沢での談笑と東京田端の澄江堂での数回の面談の話題が、高橋健二の回想に残されている。その話題の焦点は、独逸文学専攻の学生を相手に専門的な質問事項であるが、その一つに「ゲーテとトルストイに会つた男があるさうだ。こんな偉い人に二人まで会つたら、義理にでも何とかなりさうなもんだが、あいにくその男はちつとも偉くならなかつたさうだ」(「芥川氏とドイツ文学」昭和二年九月)、これは高橋健二の回想文にある軽井沢での芥川龍之介の雑談の一つである。この依拠する典拠を高橋健二が見出すのは、数年後トーマス・マンの講演論文「ゲーテとトルストイ」に於いてである。

避暑地軽井沢での年少の後輩相手の芥川龍之介の談笑のさらなる一つは、「ダンテ、シエイクスピア、モリエールト挙げてみても、ゲーテが一番骨が太く

て、どうも圧倒される。心にくい奴だ。例へばライネツケフツクスを書いただけでも素晴らしい。フアウスト第二部に到つては何人も企及し難い」というものである。

避暑地軽井沢での高橋健二に向けた芥川龍之介の質問の一つは、「私小説といふものは元来どういふものですか」というものである。さらに芥川龍之介は書簡で「文壇の士は由來早のみこみで、藝術は長く人生は短しと云ふ事も小生の言を立てるまでは西洋人には通じない解釋のしかたをしてゐたものです。」(「高橋健二宛書簡」大正十三年十月二十二日)と言う趣旨を述べている。独逸文学専攻の高橋健二が、ゲーテの「ライネツケフツクス」の風刺性に意義を認め「フアウスト」(「第二部」)の空想性に脱帽するのは遥かに後年である。しかし、同時代人として高橋健二は芥川龍之介の博学と鑑賞力の確かな事に脱帽しながらも知的に肥大した頭脳に驚嘆より不自然さを覚えたようである。以上の考察から類推するにボオドレエルの逸話「人生観をたつた一語に、一女陰の一語」は、芥川龍之介の博学、多読に依拠した典拠を持つ逸話である筈である。

高橋健二を相手に舌頭にした私小説の問題に就いては、「侏儒の言葉」(「或辯護」)で解説をしている。「Ich-Romanと云ふ意味は一人稱を用ひた小説である。必ずしもその『わたくし』なるものは作家自身と定まつてはゐない。が、日本の『わたくし』小説は常にその『わたくし』なるものを作家自身とする小説である。いや、時には作家自身の閲歴談と見られたが最後、三人稱を用ひた小説さへ「わたくし」小説と呼ばれてゐるらしい。これは勿論独逸人の一或は全西洋人の用法を無視した新例である。」(「侏儒の言葉」或辯護)という一文が、避暑地軽井沢の夏に後輩の高橋健二を相手に語り合った「私小説」に関する芥川龍之介の見解の一端である。

前掲、芥川龍之介発言「藝術は長く人生は短しと云ふ事も小生の言を立てるまでは西洋人には通じない解釋のしかたをしてゐたものです。」(「高橋健二宛書簡」大正十三年十月二十二日)は、「雑筆」(「誤謬」)の事である。「Ars longa,vita brevis(『ラテン語。ヒポクラテエスの医書の集成の格言集にある言葉。』)を訳して、藝術は長く人生は短しと云ふは好い。が、世俗がこの句を使ふのを見ると、人亡べども業顯ると云ふ意味に使つてゐる。あれは日本人或は日本の文士だけが獨り合點の使ひ方である。あのヒポクラテス(「Hippokrates前五世紀頃のギリシアの医学者・哲学者。ソクラテスと同時代。彼の名で伝わる医書の集大成があり、『医学の父』と呼ばれる。」)の第一アフオリズム(「Aphorisme〔英〕は短い断片的形式に深い体験を含せた散文。警句。冒頭にあるので第一。」)には、さう云ふ意味ははひつて居らぬ。今の西人がこの句を使ふのも、やはりさう云ふ意味には使つて居らぬ。藝術は長く人生は短しとは、人生は短い故刻苦精励を重ねても、容易に一藝を修める事は出來ぬと云ふ意味である。」(「雑筆」誤謬)と説明している。

こうした学識を披瀝するとことは、芥川龍之介の衒学的な側面である。「後で思つた事だが、私のやうに小説を書く以外全く才能のない人間はゆきづまつても何時かは又小説へ還るより仕方ないが、芥川君のやうな人は創作で行きづまると研究とか考證とかいふ方面に外れて行くのではないかと。」(「沓掛にて—芥川君のこと—」)と志賀直哉は、芥川龍之介のその方面の才能を認めている。以下は、この時の志賀直哉の発言である。「その日、芥川君は私の『兒を盗む話』といふ短篇が西鶴の『諸国物語』の一節から來てゐるのではないかと云ふので、私は『諸国物語』は一つも讀んだ事がなく、前に書いた『剃刀』といふのも似た話がビアズレーか誰かの詩にある事、それから『范の犯罪』といふのが、テーマは反對だがモウパッサンに似たものがある由聞いた事などいふと、芥川君は後人の為め何時かそれらを書いて置く必要があるだらうと勧めてくれた。私は西鶴は常に手元に置きながら、未だに其『諸国物語』を讀んで見ない程で、芥川君にすすめられてからも何年となく、それらを書かずにゐたら、却つて芥川君が何かに書いてくれた。」、ここに記述されている執筆事項は、「文藝的な、余りに文藝的な」(五)の「志賀直哉氏」の事である。こうした一連のやり取りを踏まえて後年に太宰治は、志賀直哉に噛み付いている。「どだい、この作家などは、思索が粗雑だし、教養はなし、ただ乱暴なだけで、」(「如是我聞」四)という発言である。

次の箴言「河童」(十一)の最後の断片に就いて、ヴオルテエルの理性に重きを置き神秘主義を認めない合理主義に関しては、「雑筆」(不朽)で言及している。「ゾラは嘗文体を学ぶに、ヴオルテエルの簡を宗とせずして、ルツソオの華を宗とせしを歎き、彼自身の小説が早晩古くなるべきを予言したる事ある由、善

く己を知れりと云ふべし。」と云うものである。

ボオドレエルを介してポーによって自己の文学を確立した筈の芥川龍之介であるが、その具体的な影響はどの程度のものであろう。欧州世紀末文学の退廃的な風潮のみでアナトオル・フランス程の際立った作品寄与はなかったかも知れない。何と云ってもボオドレエルで有名なのは、「『人生は一行のボオドレエルにも若かない。』彼は暫く梯子の上からかう云ふ彼等を見渡してゐた。」(「或阿呆の一生」一）という一文である。これに就いては、宇野浩二「芥川龍之介」にこの場面は、歌舞伎(「桜門五三桐」)で石川五右衛門が南禅寺の楼門から京都市内を眺望する場面から連想されたと言っている。「絶景かな、絶景かな、春の夕暮れの眺め、値千金・・・・・・」、親しい友人を揶揄してる訣であるが、意外と真実を衝いている。社会主義思想、共産主義に就いて「芥川ばかりでなく、(中略)誰も彼も、若気の至りで、それらの本を、生齧りでも、読んだものである。」(「芥川龍之介」二十）と回想を寄せているからである。

関口安義編「芥川龍之介新辞典」(「翰林書房」平成十五年十二月)所収「ボードレール」(高橋龍夫執筆）には「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」(「或阿呆の一生」一）の典拠として「悪の華」(「不運」)詩編中の「人生は短く、芸術は長い」から連想されていると指摘がある。「麒麟」「刺青」で文壇登場の内幕を誰よりも正確、精緻に把握して自家薬籠中のものにしたのは、後輩の芥川龍之介である。悪魔主義と云われる谷崎潤一郎作品の素材が、ポーやボオドレエルの作品関与からではなくアナトール・フランス「舞姫タイス」「バルタザール」作品摂取、消化の成果である事に気付いていた。「バルタザアル」(「新思潮」大正三年二月)と「タイイス」(「掲載誌未詳」)翻訳は、一面文壇登場の谷崎潤一郎の創作秘密を探索する事であった。生前の芥川龍之介は、澄江堂サロンで弟子の堀辰雄に向かい自分の文学的な素養がポーとボオドレエルだと繰返して語った。文学的な影響は顕著であるが、創作上の典拠としての両作家の存在は希薄である。悪魔主義、耽美主義の作家谷崎潤一郎「お艶殺し」「神童」「おオと巳之助」を愛読、精読しながら、芥川龍之介は自分に影響を与えたポーやボオドレエルの退廃の世界と谷崎潤一郎の構築した文学が異質である事に気付いていた。

同人雑誌「新思潮」創刊を模索していた学生時代に芥川龍之介は、帝劇で谷崎潤一郎を友人久米正雄、成瀬正一と同伴で垣間見る。この時三人は瞬時谷崎潤一郎論を闘わせるが、その一端が、芥川龍之介発言の趣旨が記録されている。それに拠れば、谷崎潤一郎の悪魔主義は欧州作家のそれとは異質で健康的なものである。「美しい悪の花は、氏の傾倒してゐるポーやボオドレエルと、同じ荘厳な腐敗の香を放ちながら、或一点では彼等のそれと、全く趣が違つてゐた。彼等の病的な耽美主義は、その背景に恐る可き冷酷な心を控へてゐる。彼等はこのごろた石のやうな心を抱いた因果に、嫌でも道徳を捨てなければならなかつた。嫌でも神をすてなければならなかつた。が、彼等はデカダンス(「dè'cadance〔仏〕。頽廃。とくに仏蘭西象徴派の作風。」)の古沼に身を沈めながら、それでも猶この仕末に了へない心と—une vieille gabare sans mats sur une monstrueuse et sans bords（「果しない、恐しい海の上のマストもない一隻の老朽船。(仏)。ボオドレールの『悪の華』の中の『七人の老爺』の末尾の一節。」）の心と睨み合つてゐなければならなかつた。だから彼等の耽美主義は、この心に劫かされた彼等の魂のどん底から、やむを得ずとび立つた蛾の一群だつた。従つて彼等の作品には、常にAh! Seigneur,donnez-moi la force et le courage ／ De contempler mon Coeur et mon corps sans dégoût!（「ああ、主よ、力と勇気を与え給え、嫌悪なくして我が心と肉体を熟視するための。(仏)。ボオドレエルの『悪の華』の中の『シテールへの或る旅』の最後の句。」）と云ふせつぱつまつた嘆声が、瘴気の如く纏綿してゐた。我々が彼等の耽美主義から、厳粛な感激を浴びせられるのは、実にこの『地獄のドン・ジユアン』(「"Don Juan aux Enfers"『悪の華』より。」)のやうな冷酷な心の苦しみを見せつけられるからである。」(「あの頃の自分の事」四)、この芥川龍之介の一文は谷崎潤一郎に関する文壇の冠した称号が、いかに便宜的であるかを証明している。あるいはポーやボオドレエルにより打ちたてられた耽美主義に日本の文壇が、接近困難である事を証明して見せている。自分の文学的な素養は、ポーやボオドレエルにより育まれたと繰り返して発言した芥川龍之介に嘘はなかった。上記の解説は、初期谷崎潤一郎を学び耽美主義の側面を熟知した芥川龍之介によってしか成し得ぬ分析である。悪魔主義の作家谷崎潤一郎が、欧州耽美主義の本質に肉薄出来ない事にいち早く気付いた

芥川龍之介は、自己の文学素養として自家薬籠中のものにしたポーやボオドレエルの作品に依拠することなく素材としてのみ利用する事に気付いた訣である。芥川龍之介作品に二作家の本質的な関与がなくて、情緒的な影響に止まるのは以上の考察により意識的な創作上の操作であったと結論付けられる。

（注５）「ポーとボオドレエルだ、好い影響も悪い影響もあつたろうが。」、この芥川龍之介発言は今日から観察すれば圧倒的に後者の影響が大きい。無名で終わったポーを発見したのは言うまでもなくボオドレエルであるが、二人は共に路上に窮死していることで共通している。肉体の衰弱の極みと困窮の中で息絶える事を芸術家の栄光であると発想する芥川龍之介の固定した考えは、二人の作家を理想化した少年期抜きには考えられない。宇野浩二を精神病院に入院させた後に広津和郎に語った芥川龍之介の言葉は、これを裏付けている。「もしあのままになったとしても立派だよ。発狂は芸術家にとって恥じゃないからね。―宇野もあれで行くところまで行ったという気がするよ」（「あの時代―芥川と宇野―」五）という発言が残されている。

ポーやボオドレエルの人生を掲げて芸術家の目標として歩んだ時から芥川龍之介の運命は決定したと言える。芥川龍之介文壇登場は「鼻」「芋粥」であるが、この作品造型は先人谷崎潤一郎「麒麟」「刺青」創作を踏襲したものだ。「論語」を典拠にしてアナトオル・フランス「バルタザアル」「タイス」の意匠を借りて作品創造を成し、永井荷風の賞賛を浴びた過去の事例を模倣したのである。さらに「鼻」「芋粥」以下の作品創作では、森鴎外「諸国物語」「十人十話」が示唆を与えている。さらに文壇登場の二作品の主題は、シング「聖者の泉」（坪内逍遥翻案「霊験」）から借りている。芥川龍之介は、自分の文学に甚大なる影響を与えた鴎外、フランス、シング等の人生に学ばなかったのであろう。

これに就いては、芥川龍之介自身が的確にその内情を分析している。ポーやボオドレエルの毒を浴びて芸術活動を始めた二人、永井荷風や谷崎潤一郎に就いて芥川龍之介は、彼等の背後に背徳臭いがなく神に離反する堕落意識も希薄であると言っている。「嫌でも道徳を捨てなければならなかつた。嫌でも神を捨てなければならなかつた。」（「あの頃の自分の事」四）と云うのが永井荷風や谷崎潤一郎が崇めた彼等の神の本質に対する芥川龍之介の鋭い分析である。翻訳詩文集「珊瑚集」はボオドレエルの詩編を翻訳し数編を掲載するも、これらの翻訳詩編から原詩の持つ背徳の臭いが消えさらには神に離反する堕落意識もない事は定説になっている。

ポーやボオドレエルの影響は、その情緒的な一面の影響のみで芥川龍之介文学に対する寄与は甚大とは言いかねるようである。これは、先に挙げた耽美主義の代表的な二作家に就いても言える事ではある。「首が落ちた話」創作で作中人物が、二度死ぬ構成に示唆を与えたのがポー「鋸山奇譚（のこぎりやまきたん）」（「A tale of the Ragged Mountains」）という指摘が、島田謹二「日本における外国文学」（上）にあるのが例外的な事例である。ボオドレエルに就いては、高橋龍夫に「人生は一行のボオドレエルにも若（し）かない。」（「或阿呆の一生」一）の有名な一文が「人生は短く、芸術は長い」（「悪の華」不運）に依拠しているという指摘があるが、本質的な影響や関与は希薄なようである。この詩文の紹介に就いては、芥川龍之介は先駆的な啓蒙的な役割を担った。「文壇の士は由來早のみこみで、藝術は長く人生は短しと云ふ事も小生の言を立てるまでは西洋人には通じない解釋のしかたをしてゐたものです。」（「高橋健二宛書簡」大正十三年十月二十二日）、この書簡を受け取った当時独逸文学専攻の学生であった高橋健二は、意識裡に芥川龍之介を破滅させた欧州世紀末文学の塵埃を浴びる道を回避して行った。

（注６）イスラム教のトルコ人である私の見聞記である。私は、印度の現地語に通じていて当地の事情に就いても詳細を極めている。「私が恆河（がんが）（「le Gange インドのガンジス河。聖なる河とされる。」）の岸にある、婆羅門（バラモン）（「brahmane バラモン教。仏教以前にインドのバラモン族〔インドの最高種族であった僧侶〕により行われた宗教。梵天〔宇宙の本神〕を中心とし、犠牲を重んじ、難行苦行を宗旨（しゅうし）とした。」）の本地（ほんじ）（「ancienne patrie 仏教用語では真実身としての仏・菩薩をいうが、ここでは聖地の意に使われている。」）、ベナアル（「bénarès ガンジス河畔の都市。アラハバードの東。バナレス。聖地の一つ。」）の市（まち）にゐた時の事である。」、私はバラモン教徒の友人オムリの家に世話になっていた。彼は著名なバラモンの修行僧であるババベツクの苦行の場面で問答をする。現世を正直に懸命に生きるも肉体的な苦行には無縁なオムリは、自己の輪廻転生の霊魂の行方に不安を持ち

先達の苦行僧に対して疑問を寄せる。「先達、あなたが私の霊魂が七世の試練を経た後で、私は婆羅吸魔〔Brahma バラモンの最高神。梵天。〕のゐる所へ行かれると御思ひですか。」、これに対してバラモンの苦行僧は、霊魂の輪廻転生には肉体的な苦悶、苦行が必要であると力説する。オムリとババベックの問答はやがて肉体的な苦悶を無意味なさしめて、苦行僧は一般人としての日常を過ごす事になる。しかし、意に反してバラモン苦行僧は世間の人々の賞賛を浴びる栄光を失う事になり、再び彼は肉体を酷使し苦行の道に立ち戻る事になる。異教徒の視線で聖地ベナアルでの狂信的宗教的な狂信を凝視して見せた訣である。

バラモン教徒の苦行の実態を精緻に描いていて、考証の正確な事で文化的な批判としても優れている。ヴオルテエルは、理性的な合理的な立場から宗教的な狂信に疑義を示した訣だが、芥川龍之介はその異文化を正確に考証する筆致に脱帽し、さらには否定された神秘的な事跡の側面に対する興味から作品の断片を翻訳して見せた。ヴオルテエル自身は、合理的な立場から霊魂の行方に意を注ぐバラモン教徒の狂信を排撃している。しかし、芥川龍之介の視線は著者が排除した輪廻転生の物語に魂の流転に、その神秘的な側面に対して注意を払ったものと思われる。

（注７）前掲「芥川龍之介『河童』注解」に拠れば柳田国男「山島民譚集」には河童が蛙を軽蔑する記述はない、作者の着想であると説明する。芥川龍之介は河童造型を蛙を念頭に置いて創作した事は、本文中の河童の具体的な描写から知られる。「ぺろりと舌を出したなり、丁度蛙の跳ねるやうに飛びかかる気色さへ示しました。」(二)、つまり河童の行動は蛙のそれに似ているのである。さらにその形態は、「頭に短い毛のあるのは勿論、手足に水掻きのついてゐることも『水虎考略』(「文政三年〔一八二〇〕古賀煜著。水虎〔かっぱ〕の事を『和漢三才図絵』などの書物によって考証図解したもの。」)などに出てゐるのと著しい違ひはありません。」)(三)、水掻きが付随している状況は完全に蛙のそれである。さらに自殺した詩人トツクの遺骸は、感触は蛙のそれである。「(一体僕はぬらぬらする河童の皮膚に手を触れることを余り好んではゐないのですが。)」(十三)、以上の具体的な記述から芥川龍之介が、人間とは異なる異形の存在河童造型に蛙を念頭に置いた事は確実である。一般的に人間にとって他者の存在を異形の概観で描き象徴する事は、普遍的なものがある。カフカ「審判」には、違和感を与える他者の存在を象徴的に描く為に指先の間に水掻きを付随させた人物を登場させている。

（注８）芥川龍之介「河童」創作中には、典拠「ガリヴァー旅行記」に依る事で著者であるスウィフトの民族的な識見がある。医者であるチヤツクが僕に披露する職工屠殺法の実態は、以下のようなものだ。「その職工をみんな殺してしまつて、肉を食料に使ふのです。ここにある新聞を御覧なさい。今月は丁度六万四千七百六十九匹の職工が解雇されましたから、それだけ肉の値段も下つた訣ですよ。」(八)、この説明を聞きさらに硝子会社社長ゲエルからその肉を食する事を勧められて嘔吐する。「僕はその闇の中を僕の住居へ帰りながら、のべつ幕なしに嘔吐を吐きました。夜目にも白じらと流れる嘔吐を。」(八)、この僕の耐えられない嘔吐の行為は、河童社会から遊離した特別なものである。会社社長ゲエルの客間から逃れる僕は、同席の裁判官ペツプや医者のチヤツクの失笑を買つているからである。「職工は黙つて殺されるのですか？」「それは騒いでも仕かたはありません。職工屠殺法があるのですから。」(八)という僕と裁判官ペツプとのやり取りは、後年イザヤ・ベンダサン「日本人とユダヤ人」(「山本書店」昭和四十五年五月)で具体的に説明される事になる。

「日本人は、安全と水は無料で手に入ると思いこんでいる」、この絶対的な安全圏で民衆を指導し引率するのは、ある種思いつめた人達であった。「思いつめ集団」に引率されるためには、国家と民族の絶対安全の保障が背後に存在しなくてはならない。二・二六事件を引き起こした安藤輝三も安保闘争の樺美智子も思いつめた人である。アウシュヴィッツで思いつめたユダヤ人は存在しなかったので上記二人は、典型的な日本人の類型である。口蹄疫に汚染された家畜は、数百万単位で焼却処分にするが、役に立つ箇所は取り出して再利用する。ユダヤ人は奇妙な思想に汚染された家畜と見做されて焼却処分にされたが、これは断じて「残虐行為」ではない。効率良く殺戮を実行する為に高性能の屠殺機械が、能率よく機能してその生産コストを低比率で押さえ込む為の工夫が、万遍なく繰り返される。この種の狩猟民族特有の発想が、「河童」(八)に入り込んだのは不思議である。スウィフトの本来持っていた民族的な思考が、依拠した「ガリヴァー旅行記」に拠ることで入り込んだと見

てよい。

（注９）「娑婆」（「梵 sahā の音写。忍土・堪忍土などと訳す」仏語。釈迦が衆生を救い教化する、この世界。煩悩や苦しみの多いこの世。現世。娑婆世界。〔大辞泉〕）あるいは「サンスクリット語 Sahā に相当する音写。われわれが住んでいる世界のこと。Sahā は〈忍耐〉を意味する。西方極楽世界や東方浄瑠璃世界と違って、娑婆世界は汚辱と苦しみに満ちた穢土であるとされたため、〈忍土〉などとも漢訳されている。なお、仏滅から弥勒菩薩の５６億７千万年後の下生に至るまで、娑婆世界は無仏で、地蔵菩薩などがその間の導師であるとされる。」（「岩波仏教辞典」）

「娑婆」の使い方は、臨機応変で晩年になるにつれて芥川龍之介は「娑婆苦」の意味で使っている。「何の為にこいつも産まれて来たのだらう？この娑婆苦に充ち満ちた世界へ。」（「或阿呆の一生」二十四）、この感想は後年のもので長男誕生を芥川龍之介が率直に喜んでいた事は、友人に対する書簡から窺える。遺稿「僕の瑞威から」（信条）は、絶望的な投げやりな表現で終始している。「娑婆苦を最小にしたいものは／アナアキストの爆弾を投げろ。／娑婆苦を娑婆苦だけにしたいものは／コンミユストの棍棒をふりまわせ／娑婆苦をすつかり失ひたいものは／ピストルで頭を撃ち抜いてしまへ。」、これは社会の秩序が苦悶の原因であるとの芥川龍之介流の表現である。

「点心」（「新潮」大正十年二月）では自室で現在も過去も安心立命の平穏な境地にない自分のことを綴っている。随筆「点心」（御降り）は正月三が日に「つづらふみ」（「上田秋成の歌文集。六巻。文化三年〔一八〇六〕刊。」）を静謐な二階で読みながらも階下の赤ん坊の泣き声で平穏が破られる事を記す。そして正月三が日の幼児の頃の記憶の遡及も嫉妬に絡んだ娑婆苦に満ちたものであった。静寂の中炬燵で時を過ごしながら芥川龍之介の感想は、「娑婆界の苦労は御降りの今日も、遠慮なく私を悩ますのである。」というものである。一年の内でも最も平穏な時間の流れを体感できる正月三が日、気侭な随筆の読書で時間を過ごす自分の意識は、現在と過去の心労で平穏が乱されているという感想である。

（注１０）「ゲーテ Goethe〔1749~1832〕はドイツの大作家。“Minion”〔1783~1784〕は南欧へのあこがれを歌った有名な詩。現在「ビルヘルム・マイスターの徒弟時代」第三巻に収められている。『いざ、立ちてゆかん・・・』の詩は『ミニヨン』の第三聯に似ている。（「筑摩全集類聚芥川龍之介全集」脚注）。「ミニヨン」は鴎外の訳詩集「於母影」収録で後に翻訳作品集「美奈和集」（「春陽堂」に再収録された。「ミニヨン」第三聯は「立ちわたる霧のうちに驢馬は道をたづねて／いなゝきつゝさまよひひろきほらの中には／もゝ年經たる龍の所えがほにすまひ／岩より岩をつたひしら波のゆきかへる／かのなつかしき山の道をしるやかなたへ／君と共にゆかまし」（「Kennst du den Berg und seinen Wolkensteg? ／ Das Maultier sucht im Nebel seinen Weg, ／ In höhlen wohn der Drachen alte Brut, ／ Es stürzt der Fels und über ihn die Flut : ／ Kennst du ihn wohl? ／ Dahin! Dahin ／ Geht unser Weg! o Vater ,laß uns ziehn!」）である。この「MIGNON」（「ミニヨンの歌」其一、其二、其三）の詩形、脚韻に就いては小堀桂一郎に詳細な脚注がある。（「日本近代文学大系明治大正譯詩集」補注三十二）

（注１１）近代教の大寺院の祭壇に胸像を並べている人物の共通項は何か。何れも基督に挑戦して敗退した人物の彫像である。そして自殺を考えながら実行に至らなかった人物列伝である。すると「第七の龕の中にあるのは・・・・・・」（十四）この胸像を芥川龍之介自身と見做した場合、この時期に彼はある種の自殺回避の方法を模索しさらにそれは可能性があると一時的に思惟していた事になる。「侏儒の言葉」（「トルストイ」「二つの悲劇」「ストリントベリイ」）は、二人の自殺未遂者の寸評である。「ストリンドベリは『傳説』の中に死は苦痛か否かと云ふ實験をしたことを語つてゐる。しかしかう云ふ實験は遊戯的に出來るものではない。彼も亦『死にたいと思ひながら、しかも死ねなかつた』一人である。」（「侏儒の言葉」）、ここで芥川龍之介が同感を示しているのは自身の自殺未遂体験である。「或阿呆の一生」（四十四）や「闇中問答」に記述した同行動を「歯車」（三）冒頭の一文は、以上の考察を念頭に置いて読むべきであると指示している。「僕は丸善の二階の書棚にストリンドベルグの『傳説』を見つけ、二三頁づつ目を通した。それは僕の經験と大差のないことを書いたものだつた。」（「歯車」三）という一文である。

（注１２）「このスプリング・ボオドに役に立つものは何と言つても女人である。クライストは彼の自殺する前に度たび彼の友だちに（男の）途づれになること

勧誘した。」(「或旧友へ送る手記」)、クライストはベルリン郊外の湖畔で人妻と自殺している。芥川龍之介は、妻文の幼友達平松麻素子と彼女の父の弁護士の縁で宿泊していた帝国ホテルで心中を企てた。この辺の事情に就いては、松本清張「芥川龍之介の死」(六)に詳しい。澄江堂の常連で龍門の四天王の一人滝井孝作は、友人小穴隆一を師に引き合わせた為に寵愛を友人に奪われてしまった。「この小穴君と芥川さんとの間柄は、また格別のもので、しっかり抱付いたような親近さで、澄江堂の晩年には、ほとんど心中もしかねないほどあやぶまれるくらいでしたが・・・・・・。」(滝井孝作「純潔」二)、以上から「河童」執筆時にクライストを想起した時に芥川龍之介の脳裏にあったのは平松麻素子と小穴隆一の存在であった事が判明する。クライスト「H.von Kleist〔1777~1811〕。ドイツの劇作家。『壊れがめ』など。湖畔で人妻とピストル自殺した。」(吉田精一脚注)、クライストの紹介は早稲田大学講師であった山本有三「ドイツの三大戯曲家小観」(「文藝講座」文藝春秋)でゲーテやシラーと共に共通の認識を持っていたが、シラーに対する芥川龍之介の評価は低かった。文学作品としては、森鴎外訳「チリの地震」("Das Erdbeben in Chill")や「悪因縁」(邦題「サント・ドミンゴ島の婚約」"DieVerlobung in St.Domingo")で親しんだ結果と思われる。両作品は「美奈和集」(「春陽堂」明治二十五年七月)収録であるが、芥川龍之介は縮版「美奈和集」(「春陽堂」大正五年八月)に拠る知識と思われる。後年太宰治門下の東大独逸文学科の学生野原一夫が、卒業論文をリルケかクライストにするか相談した時に太宰治はたちどころに後者を薦めた。両者が、図らずも人妻との心中で人生の終焉を迎えたのは運命の悪戯か。

マインレンデル「P.Mainlaender〔1841~1876〕。本名philip Bate ショオペンハウエルの学徒。世界は神の力が分裂し遂に消滅に至る過程にあり、一切の個体は仏滅によって目的を達する。それ故に自殺は讃美されるべしとし自分も自殺した。」(吉田精一脚注)。「僕のしみじみした心もちになつてマインレンデルを讀んだのもこの間である。」(「或旧友へ送る手記」)という遺書が没後に物議をかもした。同趣旨の文言は遺書「侏儒の言葉」(死)にもある。大森馬込の自宅で芥川龍之介自殺の第一報を時事新報文藝部記者榊山潤から知らされ、マインレンデルに就いて疑義を問われた広津和郎は、「ああ、それはショオペンハウエルの弟子で自殺した若い哲学者だよ」と即座に榊山潤に答えた。「メチュニコフの『人生論』の中で知ったのであった。ショオペンハウエルの厭世哲学の影響で、その頃ドイツの青年に厭世自殺をするものが盛んに出た。それでショオペンハウエルはその風潮に驚いて、『自殺は道徳的に罪悪だ』という説を立てた。ところ弟子の若きマインレンデルは師のその説に反対して、自殺してしまった。」(広津和郎「同時代の作家たち」)。これらの知識を広津和郎は、メチェニコフ「人生論」(「文明協会」明治四十一、二年頃)で中学生の頃に得たと証言している。芥川龍之介の知識も同じではないかと云うのが、広津和郎の感想である。

「マインレンデルは頗る正確に死の魅力を記述してゐる。実際我々は何かの拍子に死の魅力を感じたが最後、容易にその圏外に逃れることは出来ない。のみならず同心圓をめぐるやうにぢりぢり死の前へ歩み寄るのである。」(「侏儒の言葉」死)は、「或旧友へ送る手記」の同文の項の要約である。両者は、共に依拠する所は森鴎外「妄想」の一節、マインレンデル「救済の哲学」(「Die Philosophie der Erlöunng」)の鴎外流の要約に依拠していると小堀桂一郎「森鴎外の世界」(「第三部」)に詳細な分析がある。該当の「妄想」でのマインレンデルの自殺に就いての紹介は次のようなものだ。「人は最初に遠く死を望み見て、恐怖して面を背ける。次いで死の廻りに大きい圏を畫いて、震慄しながら歩いてゐる。その圏が漸く小くなつて、とうとう疲れた腕を死の項に投げ掛けて、死と目と目を見合はす。」(「妄想」)

(注１３)「(前文省略)従つて年よりのやうに慾にも渇かず、若いもののやうに色にも溺れない。兎に角わたしの生涯はたとひ仕合せではないにもしろ、安らかだつたのには違ひあるまい。」(十六)、僕が漁師のバッグの紹介で面識を得た郊外に住む少年の風貌をした老河童の造型に示唆を与えたのは、芥川龍之介愛読の書アナトオル・フランス「エピクロスの園」(人生)の一文である。「まず、幼虫の状態において、身を養うための嫌な仕事をなしとげるようにさせてやっていたであろう。その期には、性はないであろう。したがって飢えが愛の価値を下げることもないであろう。それからわたくしは、最後の変態において、男と女とが、輝くばかりの翅をひろげて、露と欲望とによって

生き、接吻を交わしながら死んでゆくような具合に、人間を造っていたであろう。」(「岩波文庫」大塚幸男譯)、吉行淳之介も同様な感想を寄せているが、妻子を置いて女優と同伴していた時期の事である。周知のようにこの時期の芥川龍之介は、淫乱な人妻秀ひで子との関係で煩悶を抱いていた時期である。今と違い姦通罪のあった大正時代であるが、別の愛人鎌倉小町園の女将野々口豊子の場合は「僕の生存に不利を生じたこと」(遺書)はなかったようだ。両者の相違は、女の性格の違いによるか。あるいは相手の女の夫の個性の反映か判断しかねる。

「女は年をとると共に、益々女の事に従ふものであり、男は年をとると共に、益々女の事から離れるものである。」(「侏儒の言葉」チエホフの言葉)、しかし芥川龍之介自身はこの箴言を肯定している訣ではない。「しかし僕は三十歳以後に新たに情人をつくつたことはなかつた。これも道徳的につくらなかつたのではない。唯情人をつくることの利害を打算した為である。」(遺書)と云うのが、芥川龍之介の感想である。吉行淳之介も後年、川端康成「山の音」を一読して声を失った。

(注１４) 河童国からの脱出を模索する僕は、長老から助言を受ける。「それはお前さんのここへ来た路だ。」(十六)、この発言に対して僕は戦慄を覚える。この場面は作中の僕に仮託された僕の心情にそぐわない奇妙な場面である。「河童」作中の僕の作品中の意識を超えて作者である芥川龍之介の無意識裡の不安が表出した場面である。先に「エピクロスの園」での誕生に関する夢想を実現させて見せた芥川龍之介は、自己の誕生の瞬間に思いを寄せて戦慄を覚えたのである。「河童」における生誕の意思を本人確認する場面に関係する。数ヶ月後に芥川龍之介に自殺を決行させたのは、発狂後に廃人として無残な姿を晒す実母の記憶であった。「けれども今になつて見ると、畢竟氣違ひの子だつたのであらう。」(遺書)という芥川龍之介最後の発言が参考になる。

(注１５) 慣れ親しんだ生活を捨てる事は、苦痛を伴うものだ。とりわけその生活に慣れ親しんだ老人にとっては。若者は生活圏を離脱した瞬間に新生の喜びを覚えるものだが、日常の煩雑を厭い時間と空間を遊離させ生活の場から離れれば、瞬時に新生の喜びが訪れる。マン「魔の山」冒頭の一文は、こうした若者の高揚した気分を印象的に記述している。「河童」擱筆数ヵ月後に芥川龍之介は、再度この特殊な気分あるいは感情を「本所両国」(お竹倉)で書いている。幼児にお竹倉に、その雑木林に詩想を育んだ地は、青年期には陸軍被服廠や両国駅に変貌してしまった。そしてそれらの変貌も震災でさらなる変化が著しいとして、芥川龍之介の感想が続く。「『卻つて荓州を望めばこれ故郷』と支那人の歌つたのも偶然ではない。」(「本所両国」お竹倉)と言うものである。これは中唐の詩人賈島の有名な詩「桑乾を度る」(「荓州に客舎して已に十霜／帰心日夜咸陽を憶う／端無くも更に渡る桑乾の水／卻つて荓州を望めばこれ故郷」)に拠る。賈島は、中唐の詩人で韓愈との「推敲」の故事で有名である。地方派遣の役人の常で都咸陽(長安)に対する未練を持ちながら辺境の地である荓州(山西省太原市)に居住し十年の月日が流れ、思いがけなくも都咸陽に帰還するのではなくて桑乾(桑乾河)を渡り再度辺境の地に赴任する時に、苦節の辺境の地荓州が故郷のように思えたという意である。「本所両国」を口述筆記した沖本常吉は、自分での愛唱のこの一句を芥川龍之介が「唐詩選」で確認させた思い出を記録している。

河童国に越境した僕が、人間界に戻る意思を述べた時に少年の風貌の老河童は僕に確認する。「唯わたしは前以て言ふがね。出て行つて後悔しないやうに。」(十六)、こうして河童国を脱出した僕ではあるが、人間界での境地は当初のものではない。「『行きたい』のではありません。『帰りたい』と思ひ出したのです。河童の国は当時の僕には故郷のやうに感ぜられましたから。」(十七)と言うものである。この場面での僕の行動には、芥川龍之介自身の胸中の反映がある。あるいは一般的な日本人の感性が反映しているかも知れない。故郷の地の煩雑さを厭い辺境の地に生活を求めながら、生まれ育った地を忘れられないのは共通の思いである。生誕の地である本所両国から田端の地に、東京下町から山の手に居を移した新生活は行き詰まった。この時に芥川龍之介は、鎌倉での田舎生活を捨て東京の文壇生活を営んだ事を痛恨の念を以って後悔している。鎌倉大町の離れでの新婚生活を文壇生活に不便であるという理由で引き払った事に就いて「鎌倉を引きあげたのは一生の誤りであった。」(「追想芥川龍之介」三十六)と言った。こうした芥川龍之介の痛恨の思いは、谷崎潤一郎や堀辰雄の生活に影響する事甚大なものがあった。彼ら

は煩雑な東京での文壇生活を避けて、ある種の海外移住生活を送る事になる。関西移住の谷崎潤一郎は日本古典世界に耽溺し、堀辰雄は擬似西洋である軽井沢で欧州文学の世界に身を置いた。

（注１６）拳銃自殺を遂げた詩人のトツクの作品は、哲学者マツグがゲエテ「ミニヨンの歌」の剽竊ですと失笑した作品（遺書）と死後出版された全集収録の二つの作品である。この二つの詩編から推測するに詩人トツクの才能は、切迫し心に響くものがあると云える。芥川龍之介は、「文藝的な、余りに文藝的な」（十三）で森鴎外の詩歌に就いて言及している。「けれども先生の短歌や發句は何か微妙なものを失つてゐる。詩歌はその又微妙なものさへ掴めば、或程度の巧拙などは餘り氣がかりになるものではない。」「或は畢に詩人よりも何か他のものだつたと云ふ結論に達した。」という意見である。自殺したトツクの詩は緊迫し、そして何かしら精神に迫ってくる。つまり二つの詩編から窺うに詩人トツクは、優れた詩人であった。言い換えれば芥川龍之介は、詩人として「何か微妙なものを」掴んでいると言える。

仏陀は蓮華の華の上で涅槃に入ったのではなく、椰子や竹の傍で無造作に寝る。極楽浄土ではなくて南国の道端で力尽きた。「彼は道ばたの無花果を呪つた。しかもそれは無花果の彼の豫期を裏切つて一つも實をつけてゐない為だつた。」（「西方の人」二十八）、基督に呪われた無花果は「マタイ傳」（二十一章）の記述に拠れば枯れてしまった。福音書の記述では、エルサレム入城以後の基督は別の衝動に駆られた別人である。先祖の伝承を生きる為に理性を喪失後の基督の行動を無意味なものと見做した訣であろう。仏陀が眠り、基督が死んで我々の饗宴も終わったという事である。芥川龍之介の哀切な言辞で言い換えれば、「僕もあらゆる青年のやうにいろいろ夢を見たことがあつた。けれども今になつて見ると、畢竟氣違ひの子だつたのであらう。」（遺書）という言葉になる。

ストリンドベルグ「伝説」「地獄」の芥川龍之介「歯車」への影響関係は、丸橋由美子「芥川龍之介『歯車』―〈地獄〉にみる外国文学の影響とその意義―その（一）」「同―その（二）―」の二つの論文に詳細な実証的な研究がある。後者の末尾には、臨終の時のストリンドベルグの言葉を引いている。「この書のみが正しい」「すべては赦されている！」晩年に聖書の研究に没頭し、聖書を手に取って絶命した彼の影響は、芥川龍之介の自殺の折の行動をも模倣させたという指摘である。ストリンドベルグの後者の言辞は、福音書「マタイ傳」（「六章十四節十五節」）を踏まえた発言である。「汝等もし人の過失をば免さば、汝らの天の父も汝らを免し給はん。もし人を免さずば、汝らの父も汝らの過失を免し給はじ。」（「マタイ傳」六－十四、十五）、この福音書からストリンドベルグ「すべては赦されている！」の発言が成され、両者の言辞を踏襲して芥川龍之介の遺書も書かれたという。「あらゆる人々の赦さんことを請い、あらゆる人々を赦さんとするわが心中を忘るる勿れ。」（遺書）、芥川龍之介は最期の死の儀式までもストリンドベルグを模倣した事になる。